

創価教育学会史序説（2015 夏季大学講座）

神 立 孝 一

1, はじめに

皆様おはようございます。今日一日よろしくお願い致します。

「はじめに」ということで、これから少しお話をしたいと思いますが、今回は「創価教育学会史序説」というテーマを掲げました。今日お話ししようと思っていることは、まず第一に「創価教育学会とは何か」ということ。それから、「創価教育学会」は昭和5（1930）年、20世紀の初頭に設立されていますので、その時代の「社会状況と教育」ということ。それから「政治状況」についても、お話をさせていただきます。最後に「創価教育学支援会」という、ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、そうでない方も多と思いますので、今日はこの会のことについても、詳しくお話をさせていただけたらなと思っております。

簡単に自己紹介をさせていただきます。私は昭和30（1955）年に生まれましたので、ちょうど今年が還暦になりました。それから、私の簡単な学歴ですが、東京の創価中学校ができた時、昭和43（1968）年です。学園が創立された時に、中学の1期生として、学園に入学致しました。そのあと高校にそのまま進みましましたので、高校4期生。さらに創価大学に進学して創価大学の4期生ということで、ずっと、創価の道を歩んできております。大学卒業後、修士課程2年、博士課程3年も創価大学の大学院でしたので、合計15年ということになります。本人の自覚としては、「歩く創価教育」ですけれども、私たちの仲間たちからは「世間知らず」というふうによく言われます。

さて、創価大学の大学院を修了しまして、そのまま昭和58（1983）年に創価大学の経済学部助手として採用していただきました。ですから、ずっと創価大学におります。今年で、教鞭をとりはじめてから30年になります。

2006年に「創価教育研究所」が開設されました。その時に、初代の「創価教育研究所長」の職責を仰せつかりました。この役職には任期があります。任期2年です。2年ごとに交代と思い、学長にもいつもお願いしているのですが、「ダメだ」と言われます。「創価大学というのは人使いが荒いのだから、しっかり働いてほしい」と。それで所長をずっとやっております。2014

年に「経済学研究科長」の任命も受けました。大学院の経済学研究科の責任者ということで、現在、務めさせて頂いております。

そもそも「創価教育研究所」はどのような機関なのかと言いますと、大学の歴史を残すことを第一の使命としております。現在は、「大学史」という領域がありまして、これは東京大学、京都大学、早稲田大学、慶應義塾大学など、どこの大学でも研究されていますが、一般には「自学史」とも言われています。「自学」というのは、自分の大学という意味です。各大学ではこの「自学史」の講座を設けて、学生たちに教えています。どうしてこうした講座が設けられているのかと申しますと、差別化・区別化ということになるのでしょうか。この大学は何をするのか、何をしてきたのかということ、きちんと多くの方々に知っていただく。そのためにはどうしても歴史が必要だということで、各大学が精力的に取り組んでいるところです。本学でも、創価大学の歴史を残すために色々な資料を集めて、そして様々な分野から研究を続けていますが、こうした研究を掌る機関です。ただ研究を続けると言いますが、この大学史を専門に研究をしている人はおりません。ですから、私も経済学部にも所属しながら研究所におります。研究所に所員の先生方がおられますが、この先生方も皆、それぞれ例えば法学部の先生だったり、文学部の先生だったり、理工学部の先生だったり、教育学部の先生。それぞれの専門の領域を持ちながらやっております。今のところ、何が一番中心かという、とにかく資料を集めること、創価大学に関係する資料を集めること、ということで作業を進めています。

創価大学は、昭和 46（1971）年に創立されました。牧口先生が明治 4（1871）年のお生まれですので、牧口先生のご生誕 100 年に創価大学は開学した、ということになります。1971 年が開学ですから、50 年というと 2021 年ですね。2021 年が「創価大学創立 50 周年」ですから、その 50 周年を目指して今『創価大学 50 年史』（仮称）を編集しております。ところが、50 年史というのですが、皆さんご存知のように、創価大学の創立者・池田先生が、大学をつくろうと思われたのは、先生の師匠である戸田先生が「創価大学をつくろう」とおっしゃったところから始まっている。戸田先生はなぜ創価大学をつくろうと創立者におっしゃったのかということ、もともとは、牧口先生が「創価大学をつくろう」と、こう言われた訳で、そこから始まっています。こうした背景を踏まえまして、この創価教育研究所は、基本的には、創立者の研究、それから、戸田先生、牧口先生と、順番に遡って資料を集めつつ、研究をすすめております。ですから、まだ進行形です。「これで終わり」というところまで来ていません。現在、私たちの研究所で集めた資料の総点数は、およそ 20 万点あります。これは創立者や牧口・戸田先生ご自身が書かれた直筆の物から始まりまして、例えば牧口先生が『創価教育学体系』を書く時に、どういう本を読まれたのか。どういう資料を使って研究をされたのか、ということまで全部含めてやろうとしています。牧口先生が、校長先生として、色々な教育活動されている頃の社会的な資料も全部集めています。それらを全部まとめて、20 万点ということですよ。

私はこの夏季大学講座を10数年間、継続して担当させていただいております。どうして継続的に担当させていただいているのかというと、この夏季大学講座がないと、創価教育の研究がなかなかできないのです。日常的には様々なことがありまして、自分の研究も時間が取れずにあります。最近、文部科学省からは、必ず「前期15週間は授業やりなさい」、「後期も15週間全部やりなさい」。1回休講にしたら、必ず補講をやらなければいけない。昔僕らが学生の頃、休講だったらもう大喜びですよ。「ほーら、授業なくなった。良かった」、「何をやろう」と騒いでいたのですが、最近は違うのです。必ずその代わりに1回やらなければならない。授業を今の学生さんたちは補講を嫌がるのかなと思っていたら、違うのです。「やりましょう」と言うのです。「え？やるの？」とこっちが聞く感じです。それから、最近は信じられないのですけれども、宿題とか出すじゃないですか。普通宿題は出されたら嫌でしょ？そう思いませんか？しかし今の学生は「もっと課題を出して下さい」と。「もっと課題を下さい。もっと勉強したいんです」と言うのです。そういう時代になっているのです。

そういう意味で、思うように自分の時間が取れなくなりつつあります。愚痴なのですが、ですから夏季大学講座で、皆さんと勉強するのを機会に、自分も研究を続けるということを課しないと、研究はなかなか進展しません。さて、こうした事情ですので、今日の話も、あくまでも中間報告になります。僕よりも色々なことを知っている諸先輩がいらっしゃいますので、僕の言っていることが正しいことかどうかを判断していただかなければなりません。大学はそもそもそういうところなんですよ。大学の教師の言うことを信じちゃいけません。疑うことです。「あの人が言っていること正しいのかな？」。会社に行って上司のことを疑ったら、問題になりますよね。上司が「黒だ」と言った時に「白です」と言ったら、これは問題になる。クビになるかもしれない。でも大学というのは、教師が「黒」と言ったら、1回「白」と言ってみる。これが大学のあり様だと思っています。僕も今日は、ちょっと過激な発言になるかもしれません。でも他意はありません。いつも問題になるのですが、池田先生、戸田先生、牧口先生を研究対象にしますね。通常「先生」という尊称を付ける訳ですよ。ところが本当の研究対象というのは、「尊称は無し」なんですよ。尊称を付けずに研究にすることで、全ての人たちの研究対象になる。「先生」と付けると、ある特定の集団、ある特定の人達の「先生」ということになってしまう。普通は「先生」という呼称も、通常の論文などで書く時などは使いません。こういう講座ですから、言いにくいですよ、「池田」と言うのは。言いにくいので「先生」とつけていますけれども、時々興奮すると、呼称がなくなることがありますが、他意はありません。それから、創価学会の話、当然今日は創価教育学会ですから創価学会の話にはなってくるのですが、宗教的な話も絡んでくる場合があります。これも他意はありません。あくまでも研究対象として、考えていますので、そのつもりでお聞き下さい。ここで何か宿命を転換するとかですね、幸せになろうなんて考えないで下さい。よろしいでしょうか。会合の指導でも何でもないのでからね。ぼくはそういう立場でもありませんし、ただ研究対象として考えたいと思っています。特に、僕の専門は経済史という歴史の分野でございますので、その専門分野の人間として、歴史を見てみたいということで、今日

はお話をさせていただきたいと思います。

2、「創価教育学会」とは何か

まず、今日の講座の目的です。まず一点目は、「創価教育学会がいつどのようにして成立し、いかなる運動を展開したのか」ということが問題意識です。ここで皆さん、またあいつ馬鹿なこと言っているなって、思われているのではないのでしょうか。いつといても、それは決まっている。昭和5年11月18日。皆さんそう思っていないですか？それをいつと言っているのは、僕はそこを疑ってかかっているということなんですよ。疑っているという言い方はすごくおかしいのですけれども。ご存知のようにこの11月18日というのは、牧口先生が『創価教育学体系』を発刊された日ですよ？発刊された日といっても発刊したかどうかかわからないのですよ、厳密に言うと。『創価教育学体系』という本の、奥付で発行日が昭和5年の11月18日になっている訳であって、もしかすると牧口先生の手元には11月15日に届いているかもしれない。ちょっと印刷が遅れて20日になっているかもしれない。だから、疑いだしたらきりがありませんよ。ここが学問と宗教の違いですね。「宗教は『信』から入る、学問は『疑い』から入る」といいますが。それでなおかつ、11月18日というのが創価教育学会を設立した日だと言うのですが、この段階では二人しかいません。牧口先生と戸田先生だけです。二人で、「つくろう」と言っただけです。牧口先生が創価教育学会の初代会長になりますが、牧口先生が会長に就任されたのは、昭和15年です。昭和15年に初めて、会長職というのが創価教育学会に置かれたのです。だから昭和5年11月18日の段階では、会長はいません。それは「会」を作ったといっても2人だけだから。おかしいでしょ、1人が会長、1人が理事長でやろうというもの。子供のグループじゃないんだから。きちんと会として活動するのであれば、それなりのルールがあって、規約があって、その規定に基づいて会が運営されている。そして会員の人達がいて、というふうにならないと、会としての活動とはならないですよ。そうであれば、そういう形になるのは、いつなのだろう、ということが疑問としてわいてくる。いつ創価教育学会というのはできたのだろうか。発足は、本当の源はどこなのかというと昭和5年の11月18日と言ってもいいかもしれない。「いいかもしれない」ですよ、まだ。疑問符がつきますね。そこで、それを考えたいということで、勉強し始めました。だからこれが、一つの問題意識です。本当にこの創価教育学会というのが、一般的な学術学会として、運営されて色々な運動が起こってきたのは、何時くらいからなのだろうか、ということです。

会の発足と実際の運動の開始はとりあえず棚に上げて、「創価教育学会」が宗教団体として、昭和5年の11月18日にできたと決めることは、僕自身は、何ら違和感はないのです。例えばキリスト教だって、イエス・キリストというのはいつ生まれたかわからないわけでしょ？実際に人間として、存在したかどうかともわからないという研究者もいますから。それが西暦0年だと決めたのは、後々の弟子たちです。現在に至っては、誰もそれを証明することはできない。という

ことは、宗教団体としての運動論として、そこが出発点だということは間違いじゃない。あくまでも、運動のとしての必要性から出てきたのであって、それが嫌だというなら、違う形にするしかない。それは構わないと思う。しかし、科学的に言って、学問的に言ってどうなのかということとは、これはまた別問題です。

それからもうひとつは、「創価教育学会ができたということに、どのような意味があったのだろうか。歴史的にどういう意味があったのだろうか」ということを考えたいと思ったのです。歴史を勉強していると、いくつかの点で、非常に、間違いを起しやすい。その最たるものは、今自分たちが生きている社会から、過去を見るわけですから、その時に生きていた人たちは、その後どうなるかわからないわけです。どんな展開になっていくのかもわからない。その時その時必死になって生きているわけですよ。僕たちもそうです。今、この先どうなるかわからない。だけど、一生懸命生きているわけですよ。

しかし、僕たちが現在の立ち位置から過去を見ると、それがどういうふうに展開し、どういうふうに広がってきたのかというようなことが、わかってしまっています。知ってしまっている。だから、知っている立場からその時点を見ると、色々な誤解が生じる場合がある。このことを「後追い」と言うのですが、後からこう展開してきたからこの時はそうなっているはずだとか、その時そのように思っているようだ、という推測がそこに入ってきてしまう。これは非常に、科学的ではない。ですから、それを考えていく時には、その現場で、一体その時その時の状態がどうだったのだろう、どういう社会的な環境の中で、これが起こってきたのだろうか、ということ踏まえて考えていくべきです。そうすることによって、はじめて歴史的意義というのが、別な角度で見えてくるのではないか、ということなのです。これが、今日の問題意識です。

今日どこまで話しができるかどうか、やってみないとわかりません。いつもそうですけれど、原稿無しですから。普段だったら講義ノートというのがあるのですよ。話さなければならぬことがありますので。しかし、この夏季大学講座はいつも講義ノートなしでやっています。何の原稿も無しに。何の原稿もなしという嘘になりますね、やはり。資料（当日使用したパワーポイント）も作っていますし、メモもあるわけだから。これを見ながら順番にお話ししたいと思います。

この作業を通じて、最終的に理解したいことは何かということ、「創価教育とは何か」ということなのです。そもそも、牧口先生が、『創価教育学体系』という、この教育学に関する書物をまとめようと、あるいは、牧口先生が生きていた時代の教育の局面を、どうにかして変えていこうと思わなかったならば、当然、牧口先生は法華経には出会っていないし、「創価教育学会」もできていない。無論、創価大学もない訳で、私たちが今ここにいる理由は、なくなってしまうのです。牧口先生が「創価教育」を考え出したからこそ、今私たちがここにいるということなのです。この事実からすると、どうしてもこれを外しては自分の立ち位置といいますか、今ここに

る意味・意義・価値というものがわからない。なぜ僕たちは、今ここにいるのだろうか。これは毎回申し上げておりますけれども、牧口先生が『創価教育学体系』を考案し、その後に法華經に出会ったのです。牧口先生が、法華經、日蓮の仏法に出会う前に「創価」ということを考えているのですよ。ご自身が『創価教育学体系梗概』という本の中で述べられています。「『創価教育学体系』第一巻がまさにまとまろうとしていた時に私は日蓮の法華經に出会った」と、こう書いてあるわけですから。僕たちは往々にして、牧口先生が「法華經に出会って、日蓮仏法に出会って、それでこの創価というのが生まれてきたんだ」と思いがちです。けれども、これは逆なんです。むしろ逆だというのがすごく大事であり、すごく重要なのです。「創価」というものを生み出して、なおかつ牧口先生は日蓮の法華經を必要とした。この点が重要なのです。そこのところを考えておかないと、全然違ったことになってきてしまう。そういうことで、最終的な、究極の目的は、その「創価教育とは何か」ということを考えることだということなのです。これを10年ぐらいやって来ましてね、なかなか結論が出ないし、なかなか大変なんです。若い先生たちと研究してるのですけれどね。この創価教育で目指すものというのを、本当に一般的な言葉で語るとどうなるのだろうかとか、色々な角度から考えていますけれど、なかなか結論が出ません。創価大学には、定年があります。定年は70歳なんです。従って、僕にはあと10年しかない。あと10年でどこまでいかわからないですけど、追求し続けたいと思っています。

本題に入ります。「創価教育学会とは何か」ということを、まず考えてみたいと思います。それで、今、お話をした、『創価教育学体系梗概』という本ですが、これは本というよりも、パンフレットのなものとの方がよいかもかもしれません。身近にいる青年教師たちに、自分の書いた『創価教育学体系』の内容をコンパクトにまとめて、今から自分たちがやろうとしている運動のことを知ってもらいたい、ということで、牧口先生が作った。これが、『創価教育学体系梗概』です。これは、昭和10年くらいに出来たのです。昭和10年の春ぐらいに作られたのだろといわれているものです。パンフレットですから、発刊の日付がないのですよ。『創価教育学体系』に関する研究者で、斎藤正二先生という方がいらっしゃるのですが、斎藤先生がこの梗概を色々考察されて、次のように分析されました。この本の最初の部分には「緒言」という部分があります。「はじめに」とか「序」と同じことです。そして、最終部分に「結語」があります。「結論」にあたる場所です。斎藤先生はこの二つの箇所は、牧口先生ご自身が書かれたのであろうおっしゃっています。それ以外のところは、「創価教育学会」に所属している若い先生たち、中心になって活動していた人達が『創価教育学体系』をまとめて、色々な人に知ってもらいたいと思って作ったのではないかと分析されています。そして、その一番最後の箇所に、「創価教育学会要覧」が掲げられているんです。その要覧はいくつかに分かれて、書かれています。『創価教育学体系梗概』は昭和10年頃の発行ですから、『創価教育学体系』の刊行から5年後になって、ようやくこの要覧というのがまとまってきている、とだけいただければいいのではないのでしょうか。それが、配られた。たくさんの青年教員を、「自分たちの創価教育学会の運動に入ってもらいた

い」というような意図の元に、こういうようなものが発行されています。当然これは、昭和15年の時には、全面的に改められていますので、正に途中経過なのですけれども、これを一つひとつゆっくりと読んで、分析してみましょう。

まず、文言を少しずつ読みます。

「『日本の教育問題を議する出発点として、二（ふたつ）の行詰り－ 経済上のそれと、思想上のそれ－を指摘して、此の難局打開の策は、たゞ教育の一途あるのみ』とは、故新渡戸博士が、創価教育学体系の序文に於て、本会の企図を裏書してゐる所で、之はまた本会に特別の賛助せられてゐる各顧問の等しく共鳴する所である」（『牧口常三郎全集』第8巻418頁、以下『全集』と略記）

牧口先生は、明治時代のお生まれです。それで、この本は昭和の初期の話なので、言い方としては古い言い方になりますが、要はこの一番初めに、新渡戸稲造の言葉があげられています。この方は、牧口先生と非常に親交が深かった人で、北海道で一緒に研究をしています。その後も、牧口先生は神奈川県の内郷^{うちこう}という地域などで、勉強されているのですが、そこでも一緒に活動していた方です。ご存知のとおり、新渡戸稲造というのはお札にもなった人で、『武士道』という有名な本を書かれています。カナダのバンクーバーで亡くなっています。国際的にも非常に評価の高い先生です。この方が、日本の教育問題を色々と議論する出発点、課題として挙げているのは一体何かというと、一つは経済上で行き詰っていること、それから思想上で行き詰っている、ということを描いています。「経済」という言い方が、僕たちが今使っているものとややニュアンスが違うのですが、よく読んでみると、むしろ「合理性」というような意味です。一番有効なやり方という意味だと取って下さい。「経済的」と言うと金銭的なものにいきがちですが、ここで言っている「経済的」というのは、「合理性の追求」とか、「無駄をなくしてダイレクトに教育するのだ」とそういう意味で使われています。

「経済上」と「思想上」の二つの点に「行き詰まり」がある。この二つの行き詰まりという難局を打開するためには、教育しかない。教育がとにかく一番大事だ、ということを行っている。これについては、この創価教育学会に関して、様々な形で賛助、賛同してくれている人達も同じ考えだということを、まずここで訴えています。「要覧」は続けて、つぎのように述べます。

「この難局打開策としての教育は、既成の教育制度並にその内容だけの小改革であつてはならぬ」

日本の教育問題の出発点としてあげられる、経済上、思想上生じてきた問題を打開するのは教

育しかないのだけれども、ここでいう教育は、現存の教育ではない。もっと新しい形の大きく変わった教育でなければだめなのだ、ということですね。

「もっと深く根本の指導原理から建て直さなければ忽ち行詰りを再びするまでであらう」

指導原理という最も教育の重要なところから全てを変えていかない限りは、また同じことを繰り返すことになる。これは、まさにその通りで、おそらく牧口先生が指摘されていた昭和初期の教育問題と、今私たちが直面している教育の問題は、あまり変わりはない。なぜならば、根本的な指導原理が変わっていないからです。どういうことなのかというと、ここからは僕の推測です。教師が生徒に対して教えることを指導原理というのであれば、ずっと同じです。この点は何にも変わっていない。牧口先生の「創価教育学」の理論では、そうではないという。教えられた人が、自らを変えていく。自ら何かを生み出していくのだ、という気持ちになること。そうさせていくための原理はどこにあるのか、ということを問うているのですね。自らが変わるといいますから、根本的に違うわけですよ。そのことをここで訴えているわけです。従って

「これ本会が創価教育学研究を中心に教育学の根本的研究をなして、少くとも左の五箇条の提唱をなして、教育改善を叫ぶの所以である」

ということになります。根本であるところの指導原理を立て直す。そのための研究をしなければならぬ。その研究のための5か条というのは何か。これは、『創価教育学体系』にも書かれていることなのです。「緒言」という、先ほど言いました「はじめに」というところですね。『創価教育学体系』の「はじめに」の箇所に書かれてある5つの項目。これが再度掲載されています。これは創価教育学会の、言ってみれば一番初めの源で、何を目指しているのかという話なのです。すこし難しい話ですが、まず1箇条目です。

「教育の経済化によつて、能率が増進されねばならぬ、これを目標として教育改善と教育技術の両方面に、今の教育が改革されるならば、教育力」

つまり教授力・学習力・時間、

「……時間は少くとも半減される筈と信ずる」

教育をするということ自体の能率が、上がってこなければいけない。では、「教育の能率」とは一体何か、という話になるのですが、能率を上げなければいけない。そのために改善をしなければいけない。さらに、教育力とは一体何かというと、牧口先生が考える教育力というのは、教授力、教える力。学習力、これは生徒たちが学ぶ力、時間。だから短時間でたくさんの方が勉強できたら一番いいわけですよ。そういうようなことを言っているわけですね。それが、少な

くとも半減すると言うのですから、義務教育の6年間でやっていることが3年でできるようになる、ということです。

2番目、これは後々効いてくる非常に重要なことだと思っている点です。

「盲目的自然的の教育法が抛棄されて、明目的計画的系統的なる文化的教育化によって、施設経営がされ、知行合一の主義によつて価値創造力が涵養されねばならぬ」

「盲目的自然的」というのは「何も考えないでありのままに教育すればいいんだ」というやり方のことを指すと思われます。それは絶対ダメだということです。目的がきちんと定められ、そして計画がきちんと立てられている。その計画も筋道がきちんと通っている。そういう教育がなされなければならない。そのためのポイントは「知行合一の主義」だと述べられています。「知行合一の主義によつて価値創造力が涵養されねばならない」とのことですが、ここでいう「知行合一」とは一体何かというと、「王陽明が最初に自分の立場を表明した際に使った言葉で、これは、『知』と『行』、すなわち知覚と行動、あるいは体験が不可分であることが説かれている」。これは、牧口全集第5巻の中に(417頁)出てきている「知行合一」の説明です。つまり、この理論的「知」を学ぶこと、理論として理解することと、「行」というのは実践。したがって、学ぶことと、実践、具体的にやることとが、合一する、一緒であること、不可分でなければいけない。学んだことが体験の中で生きてくるということだと考えられます。よく言われる、「理」と「事」という概念なのですね。牧口先生が、この『創価教育学体系梗概』のなかでも、一番最後の結論のところ述べておられることと一致します。要するに、自分が法華經に出会って、法華經をなぜ自分の信念として保とうと思ったのかと言えば、それは、「理想を具体化する」こと。日蓮大聖人は理想の法華經をどうすれば実践できるのか、理想をどうすれば現実化できるのかということ説いているからなんだという趣旨のことを述べています。「自分の理想をどういうふうに具体化するのかということは、この大聖人の教え通りやれば絶対できるはずなんだ」、「それを自分は日蓮から学んだので、そのためにこの法華經に帰依したのである」ということが書いてあるのです。ここで言っている「知行合一」という言葉と、まさに合致します。合致するというよりも、多分、その時の牧口先生の考え方を一般的に伝えようとしたら、この「知行合一」が一番便利だった。当時、この陽明学のことは、多くのインテリたちは知っていたはず。だからこういう言葉で説明するのが最もわかりやすかった。つまり、教育というのは、教えるだけではダメなのだ。実際の生活の中でそれを活かさなければいけない。活かすためにはどうしたらいいか。それは「価値創造」である。つまり体験と学習をずっと続けながら、その中で自ら何かを生み出していくという、そういう力を付けていくしかない、ということの表れで、大事なことだと思います。

3条目から5条目は簡単に説明します。

「前項の重任に堪へるだけの優秀教員を得んが為に、教育者が優待されると共に、精選されねばならぬ」

「前項の重任」というのは何かというと、この「盲目的自然的の教育法が抛棄されて」ということです。実際の授業の中で「知行合一の主義によつて価値創造力が涵養」できるかどうか。その重任、思い責任に耐えるだけの優秀な教員を得なければならない。そのためには、教育者がきちんとした形で、「優待されなければならない」。もうすこし環境などを整えてほしい、ということです。これは、今、僕らが見ると、教員だけが特別待遇を求めているのではないのかとうつるかもしれません。しかし、そうではなくて、当時の状況を見ると、例えば、戸田先生が初めて18歳の時に代用教員で真谷地（まやち）というところで教鞭を取ります。その時に、「教員の待遇がひどい。こんな待遇だから優秀な人達は皆、他の仕事の方になってしまうのだ。将来のことを考えたら優秀な教員が大事である。優秀な教員がいなかったら優秀な人間が育たない。なぜこういう待遇なのだ」ということを嘆いて、当時の文部大臣に手紙を書こうとする、出そうとするわけです。代用教員として。この戸田先生の問題意識からしても、恐らく当時の教員は、ある種恵まれていない。お給料も安かったり、重労働だったり。今もそうかもしれませんね。今も色々なことを言われていますよね、学校の先生方は。非常に大変な仕事だと思います。これは、ヒックマンという、デューイ研究所の所長さんと話をした時に、ヒックマン先生が笑って言っていましたけれども、「教員が一番大変なんだ。どうして大変なのかというと、皆さん必ず教員の職業に出会っている。自分も教えられている。自分の経験からみて、自分の子供たちの先生が本当にいい先生かどうかということを判断しようとする。必ず比較されているのだ。こんな職業はないぞ」と言うのですね。笑っていました。それはそうですね。他の職業だったら、その職業の人とあまり出会うことがない場合もありますが、教員とは必ず出会っています。嫌な先生だとか、すごい先生だとか、色々こう経験があると思うのですね。その経験と照らし合わせられるわけです。例えば僕たちでもそうです。自分が習った時の先生と比べて「なんだ、あいつ、しょうもない奴だな」などとささやかれているわけです。そのなかで菌を食いしばって頑張らなければいけないという辛さです。その意味では、牧口先生は「優待されると共に、精選されねばならぬ」と言っているのですけれども、その時の教員の待遇というのはそれほど良くなかった。それを嘆かれているのですね。なおかつ、そのなかでも優秀な人間を選ばなければいけない、優秀な人間を選ばなければ優秀な教員にならないぞ。こういうようなことを言っています。それから

「教育制度も教育方法も、生産的創価的に改革されねばならぬ」

「生産的創価的」というのは、きちんと「価値を創造する」という意味です。

また、これも一つの大きな問題提起なのですが、いつから牧口先生が「創価」という言葉を使い始めたのか、という問題があります。しかし、これはわからない。色々な角度から研究をして

います。「創価」という言葉自体、いつから使われたのか。「価値創造」というのは、これは当時、結構色々な社会学者や哲学者が使っています。「価値創造」は牧口先生のオリジナリティではないのですね。「創価」というフレーズにしたのは、牧口先生と戸田先生が考えられたのだと思われますが、それはいつなのか。これは今のところまだわかっていません。一応、昭和3年か4年、という説があるのですが、はっきりしません。

5 番目です。

「社会学的社会観により、学校が一箇の社会として経営されて、教育殊に道德教育の源泉とならねばならぬ」

学校が社会だというのは、私たちにとっては普通のことですけれども、当時はまだ学校が社会だという認識はありません。特別な空間です。だからそういうことをここで述べています。これが趣意書の最後のところです。「創価教育育」になっていますが、これは原典が間違っていた。「ママ」というのは「そのままですよ」という意味です。これ僕が間違えたわけではなくて、そのパンフレットの中でこうなっている。

「創価教育^{ママ}体系著者の熱烈真摯（しんし）なる主張は、將に我国刻下（こくか）の実状に照して一日の猶予を許されない急務と信ずる。これは苟（いやし）くも国家の前途を憂ふるもの、等しく同感のこと、信ずる。これ本学会を設立する所以である」

従って、この趣意書の中で述べられていることが、創価教育学会を設立する理由である。つまり「教育改革」だと言っているわけです。これが昭和10年の段階で、『創価教育学体系梗概』というパンフレットとして配られたのです。なんとなく、創価教育学会の実態がわかってきますよね。創価教育学会とは教育の学会だったんだぞという程度にしか言われなくてもいいかもしれませんが、その中身はどういうものであったのかと問われた時、こうした現状の教育上の問題をなんとか解決しようとして、多くの有志を勧誘しながら一つの運動体にしようとしたのだ、という答えになるかと思います。

創価教育学会「綱領」というものもあります。これも簡単に説明をしておきます。

「前陳の目的を達し、帝国の教育を改造せんが為には、少くとも左の六大問題に就き、制度、内容の両方面に亘り、徹底的の研究を要すべく、その為には教育報国の念に燃ゆる熱烈純真の少壮教育者が異体同心の団結をなして、實際的研究の示範（しはん）をなすことと、これを理解し援護して、教育国策の確立に心配される先輩有志の協賛を必要とする。これ吾等の微力を致さうとする所以である。希（ねがは）くば同好の志士は奮つて賛同あらんことを」

「前陳の」というのは、言うまでもなく先に説明しました5条目のことを指しています。この文を読むと、勧誘していることがわかります。誰を勧誘しようとしているのかというと、まさに若い「少壮の教育者たちよ、集まれ！」と、こう言っているわけです。「左の六大問題に就き」とは何なのかというと、まず、一つ目

「小学より大学までを半日学校の制度となし、教育の経済及び合理化を謀ること」

これが半日学校制度ですね。この制度も牧口先生が言い出したことではなくて、もともとそういう制度がありました。例えばアメリカでは、先ほどお話ししたジョン・デューイという教育学者がいますが、この人も半日学校という、要は一日のうちの半分は勉強する時間で、半分はそれを使って自分たちで何かやる、経験するということなのです。この経験というのは理科の実験だったり、家庭科でのお料理だったり、裁縫だったり、何か自分でやるという、具体的なことですよ。工作をやったりとか、そういうことを指しています。まず小学校から大学まで、学んで実践する。先ほどの「知行合一」ですね。学んで実践する、実践して学ぶ、そういうことが必要だということが、一つめの提案ですね。次に

「第二、小学校長登用試験の制度を確立し、優良教師の帰趨を明かにすると共に、その擁護をなすこと」

校長を任命する仕方がおかしいと、牧口先生は一貫して主張しています。小学校の責任者をどのように選ぶのか。その選び方が、今の国家のやり方ではおかしい。この小学校長登用試験の制度についての改革を牧口先生は何回も何回も論文に書いています。これについては、まだ僕も詳しくありません。なぜこういうことを考えておられたのかという問題については、次の課題にさせて下さい。これはわかりません。皆さんにご説明するだけの何の力も私にはありません。ただ、そういう問題意識を持っていたということです。

「第三、師範教育の内容を改善し、教材注入のみでなく、教育職業専門の教育をなすこと」

師範学校というのは皆さんご存知のように、教員の養成学校ですよ。教育大学です。そこでの教育の在り方が、やはり違うのではないか。内容をもっと考えるべきなのだ。教員を養成するための教育の方法をもっときちんすべきであると言っています。「教育職業専門の教育をなすこと」ですから、それに対して牧口先生は、おそらく不満があった。現在では、教職大学院ができてきました。本学でも教職大学院を設置しています。まさに師範教育、教員養成のための中身を考えなければいけないと訴えています。

「第四、教育本部なる教育国策審議機関を設け、国防、産業等と同儀に永久的教育国策確立を謀ること」

「第五、国立的教育研究所を新設し、教育国策確立の準備的補助的機関とすること」

「第六、教育指導原理としての科学的、教育学の樹立を世界的に謀ること」

これは、創立者の池田先生がよく言われている、「三権分立ではなく四権分立」のことだといっても良いかもしれません。その発想がこのところに既に秘められているわけです。だから国として、三権分立と違う「教育は教育」としてきちっと国策として、整えるべきなのだということを、牧口先生は問題意識として持っている。これらを解決するために考えていくことが、実は「創価教育学会」の目的ということになるのではないのでしょうか。

この学会の会則と要項とが次に出てきます。

「第一条 本会は創価教育学会と称す」

「第二条 本会は創価教育学体系を中心に教育学の研究と優良なる教育者の養成とをなし、国家教育の改善を計るを以て目的とす」

創価教育学会は、『創価教育学体系』という本を中心に教育学の研究を行い、優秀な教育者を養成する。そして、国家教育の改善を図る。これが目的なのだ、とうたっているのです。

「第三条 本会は本部を東京に置く其の他の地方には支部を置くことを得」

「第二章 事業及集会

第四条 本会は第二条の目的を達するため次の事業及び集会を行ふ

- 一 教育研究所の設置
- 二 研究会、講演会、講習会の開催
- 三 図書及び雑誌の刊行
- 四 総会（毎年一回）但臨時開催を妨げず
- 五 その他適当なる事業

これは説明を要しませんね。「教育研究所の設置」。この教育研究所の所長に牧口先生が就任します。それから「研究会、講演会、講習会の開催」。講演会の企画を行い、実際に講演会の開催もするという事です。つづけて、

「第三章

第五条 組織 本会は左記四種の会員を以て組織す」

創価教育学会の会員は、正会員、特別賛助員、賛助会員、臨時会員、この4つと定められました。これは、学術団体としては、一般的だといえるでしょう。こうしてみると、昭和10年段階、すなわち『創価教育学体系梗概』が出た頃には、このように会員も決まり、会としての体をなしてきていることがわかってきます。

「**第六条 本会に次の役員を置く**」

これは、会長、理事、評議員、となっています。ただし、この10年の段階で会長の人事は決まっていない。実際には置いていない。こういう役を置くだけ決めて、実際には置いていないですね。それから

「**第七条 本会に特に事業の一方面を遂行するために部を設けることを得。**」

「**第八条 本会の統制を紊（みだす）るものは之を除名することあるべし**」

これが『創価教育学体系梗概』に載っている「創価教育学会」の基本的なルールです。これができるようになったということです。私たちがみることができる、「創価教育学会」の最も古いものです。

さて、最後部に顧問の人名が掲げられています。「元オーストリア大使秋月佐都夫、学習院初等科長石井国次……」というように、役職と人名が記載されています。例えば、冒頭に記されている「秋月佐都夫」を調べてみると、「創価教育学会の創立に携わった」というような説明が出てきます。従って、「創価教育学会」というのは、広く知られた団体であることが推測できます。さらに、「貴族院議員 古島一雄」という人。この人は牧口先生のことを高く評価しており、様々な援助をしているようです。こうした点も、今後の研究課題です。「日本大学教授 田辺寿利（たなべすけとし）」という先生がでてきますが、この方が『創価教育学体系』発刊時に、「序」において推薦文を書いた先生です。当時社会学の学者としては、トップレベルの先生で、やはり牧口先生を高く評価していた方です。それからもう少しあります。「海軍大将 野間口兼雄」「東京朝日新聞顧問 前田多門」。それから、「元貴族院書記官長 東京朝日新聞顧問 柳田国男」。この人が、みなさんよくご存知の民俗学者の柳田国男ですね。この人も、牧口先生と長い期間にわたって一緒に研究をしています。これが昭和10年代のもので。ここで、何故、名前をあげたのかというと、先ほどちょっと触れました「創価教育学支援会」の構成メンバーと、このメンバーを照らし合わせてみたかったからです。後から出てきます。支援会は、この段階よりもっと前のものです。それが数年経って役職が変わってきていますが、比較のために、ここでざっと挙げておきました。要覧の中に出てくる牧口先生の肩書きは、「創価教育学会研究所長」と「創価教育学体系著者」。戸田城外、言うまでもなく戸田先生のことですが、戸田先生は「創価教育学会常務理事」という役職名になっています。「常務理事」は設定されているのですが、「会長」はいません。結

局、「創価教育学会研究所長」です。職名だけだと、私とよく似ています。無論、中味は全然違います。ともあれ、牧口先生は研究所を作り、そこの研究所長として活動をしている、と表明しているのです。会長ではない。これは一体何を意味するのだろうかというのは、課題です。戸田先生は常務理事。では、理事と常務理事とはどう違うのかということも知りたいところですよ。しかし、わかりません、今のところは。知りたいことばかり出てきます。この『創価教育学体系梗概』をみて、この要覧とか趣意書を読んだだけで、色々な疑問が出てきました。これを一つ一つ解決していくためには10年では間に合わないですね。誰か若い人に任せなければならないということです。

3, 20世紀初頭の社会状況と教育

さて、次のテーマに入ります。「20世紀初頭の社会状況と教育」ということで、ちょうど牧口先生が、『創価教育学体系』を著そうとした頃の社会状況はどうだったのかということを知りたい。そうでないと、その時期にこの本を出したという意味がよくわからなくなります。勿論ご自分の人生がありまして、牧口先生ご自身は校長先生をずっとやり続けながら、この『創価教育学体系』をまとめていくのですが、当然、自分の経験上から出てきた色々なことを書き表そうとするのですが、「どうしても出版しなければならない」と思わせたのは、一体何だったのかということです。それは社会的な状況、これをみなければよくわからないだろうということで、そこに目を転じてみましょう。

『創価教育学体系』の第1巻の発刊は、ご存知の通り、昭和5年（1930）年の11月18日です。社会的事象として挙げられるのは、ロンドンの海軍軍縮会議。それから11月14日に浜口首相狙撃事件、時の総理大臣である浜口雄幸が暗殺されました。まさに、『創価教育学体系』が発刊された同じ月です。

まず、この『創価教育学体系』（以下『体系』と略記する）第1巻の緒言、これは「はじめに」にあたる場所です。長いですが「緒言」は、長いのですけれどもそのなかに出てくる一節で、とても有名な一節をまずみてみましょう。『体系』を、何かの形で扱おうとする人は、必ずこの箇所を引用すると言っても良いかもしれません。

「一日も早く社会の一顧を得て、国民教育の不安を救ひたいといふ情だけは益々濃厚に赫熱（かくねつ）して来たのである」（『全集』第5巻8頁）

つまり、その時の国民教育というのは、不安だった。色々な人が教育に対して不安を持っている。それを何とかしなければいけないという思いが、沸々と湧き上がってきて、もう如何ともしがたいような状態になっているということです。それはどうしてなのだろうか。

「入学難、試験地獄、就職難等で一千万の児童や生徒が修羅の巷に喘いで居る現代の悩みを、次代に持越させたくないと思ふと、心は狂せんばかりで、区々たる毀誉褒貶の如きは余の眼中にはない」（『全集』第5巻8頁）

これは、今の状況を書いているものではありません。昭和5年です。どうです皆さん、入学難、試験地獄、就職難。数年前の日本と同じじゃないですか？その時と同じような状況のなかで、牧口先生は、「一千万の児童や生徒が修羅の巷に喘いで居る現代の悩み」を、次の時代に持ち越させたくないと言っているのです。面白いですね。数年前同じような状況だったのに、こういうことを言う人は出ませんでしたね、日本では。どうですか。「教育を何とかしなきゃいけない」と、大きな声で叫んでいた人はそれほどはいなかった。いずれにしても、私たちが抱えている諸課題が存在した、似たような社会状況だったということです。我々が抱えている問題と、さほど差がないということが、ここを読んでいると認識できます。そこで、当時の学校のシステム自体を、おいかけてみようと考えました。どうして入学難が生じ、試験地獄、就職難になったのだろう。それで一千万の児童がだいたい苦しんでいると、牧口先生は述べているけれども、実際はどうだったのだろう。この点に焦点を当てて、歴史的事実をみてみました。

まず、学校がどういう形ででき上がってきたのか、ということです。明治5（1872）年に「学制」ができます。発布された「学制」というのは「基礎的な学校教育を全ての人に付与しようとする制度構想」です。牧口先生は明治4年の生まれですので、ちょうど牧口先生が生まれたと同時に、国家自体も明治政府になって、いわゆる富国強兵策をとった。要するに、目指すのは、とにかくヨーロッパの列強諸国に追いつきたい、並びたいと思った。そのために何が必要かということ、教育だということに気づいている人達がいた。その人達が、とにかく基礎的な学校教育を全ての人たちに施さなければならない。このようにして、この制度を考えだしたのです。そしてそれを発布したのが明治5年です。その意味では、日本という国の特色が出ていますね。まず教育だと考えたのです。明治12（1879）年、「教育令」が発布されました。教育の地方分権化を推進するという内容です。つまり、国家が国家一本でやってきたことを、地方に分担させようということです。それまで国家が決めていた「学制」を廃止して、町や村を基礎にした小学校を設置する。町立、村立、そういう学校にする。国が命じてこの区域はこの学校、この区域はその学校ということではない。地方それぞれにきちんと学校を作る。そういう一つの権利、権力を与えましょうと、こういう話になったのです。

明治19（1886）年になると、この「教育令」を廃止しました。廃止して何をやったのかというと、「帝国大学令」「師範学校令」「小学校令」「中学校令」という非常に細かい法律をつくり出しました。これが言わば戦前の学校制度を確立させた、根本的法律になります。だからある意味で、日本の教育制度は、この明治19年から出発したのだといってもよい。先ほど言った明治5年というのはあくまでも理念です。理念だけといえるでしょう。学校での教育を、全ての人たちに施さなければいけない、という理念です。理想です。目指すべき点。それで、具体的にど

うするのかというと、それから14年かけてこの法令をだしました。「各府県に一校の公立尋常中学校と各郡に1,2校の高等小学校、各町村の尋常小学校を配す」というのがそれです。ここでは、年齢の下から言うと、小学校も「尋常小学校」と「高等小学校」がある。その上に、今度は「尋常中学校」がでてくる。それから、教員の養成制度。これについては、全国に官立一校だけの「高等師範学校一校」を作る。それと「尋常師範学校」。これは、各府県に府県立一校。ですから2段階からなる師範学校制度を設立する。つまり、師範学校も「高等師範学校」と「尋常師範学校」があるということになります。

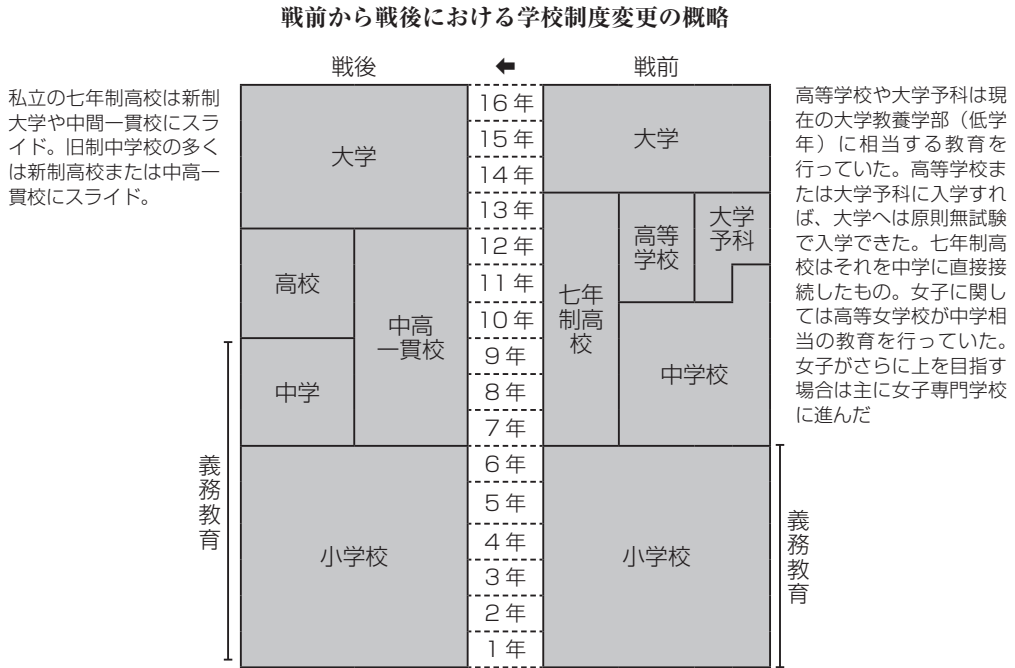
牧口先生は北海道の「尋常師範学校」に入るのです。今の「北海道教育大学」です。こうしたことをみると、国家の方策がもの見事にわかります。各都道府県に、師範学校を作るということは、教育をするためには、教員が大事だ、という認識があるからですね。その教員はどのように育成するのかというと、その地方ごとに優秀な人間たちを集めて教育しなければいけない。それで教員を作っていこうというわけですね。牧口先生は、この北海道立の「尋常師範学校」に入りました。ここには第一種で入りました。これは入学試験のない種類の形態です。そのかわり、各都道府県の自治体の責任者、当時の北海道ですと、「郡長」だとか「県長」だとか、そういう人たちの推薦書が必要です。入ったならば学費はタダです。生活費もタダです。寮でするので全部、国家が出します。国家が全部丸抱えです。それで教育をします。ただし、そのためには条件が一つだけあって、卒業したら必ず教員にならなければならない。教員になることが条件です。そうやってその当時優秀な、その地域で優秀な青年たちを師範学校に集めたのです。ですから、そもそも教員の養成から始まっているのです。これは間違ったやり方じゃないですよ。このように始まりました。これが明治19年です。

今度は明治24(1891)年に「中学校令」が改正されます。府県立中学校の一府県1校の制限を撤廃。従って、それまでは、府立県立の中学校は一校しかなかったのが、複数の設置を認める、ということになって広がっていきました。つまり教育の場が広がったということです。「高等女学校」と呼ばれていた学校が、中学校と同等の扱いを受けるようになりました。これもポイントですね。女性をどうみているのか。これはまた研究すると、すごく様々なものがでてくるのですが。江戸時代からの女性というのは、どういう扱いを受けていたかという話です。混沌とする社会の中で、明治の初めのころはどうだったのかというと、家長制度が中心だということになります。ですから、女性というのはなかなか認められなかった。これは、また研究してどこかで報告できたらいいなと思っていますけれども。女性に対する問題意識を牧口先生は随分早い頃から持っておられます。女性と男性が違うというけれど、どうして違う必要があるのか、と思っているのですよ。牧口先生が「高等女学会」という、通信教育制度を作ったところにも表れていますけれども、これはまた次の、別の課題です。

明治32(1899)年に新たな「中学校令」が公布されました。中等学校制度の基本形が成立致します。「高等中学校」というように当時呼ばれていた中学校が「高等学校」と呼ばれるようになっていたので、「尋常中学校」が「中学校」と呼ばれるようになりました。つまり「高等中学

校」が転じて、「高等学校」になっていったのです。「尋常中学校」が「中学校」です。だから、高校と中学校の教育を合わせて「中等教育」と言います。小学校が「初等教育」、中学校、高校が「中等教育」。そして大学が、「高等教育」ということです。出発点はここにあります。

図1 戦前から戦後における学校制度の変遷



出所) おおにしとしまさ『名門校とは何か?』(朝日新書、2015年、66頁)より転載。

20世紀に入り、明治40(1907)年、義務教育年限を6年に延長致します。小学校の教科書が文部省の編さんによる全国統一ということになりました。戦前と戦後の学校の形態を比較するために、図1を用意しました。この図をみて下さい。

まず、戦前の小学校ですが、6年間の義務教育があって、その上に中学校があります。ただし、中学校の脇に、7年制の「高等学校」があるのです。更に中学校の上には別の制度による「高等学校」があって、「大学予科」が設けられていました。ここでいう「高等学校」と「大学予科」は、大学の教養学部にあたるもので、多少異なってはいますが、今で言う大学の1年生、2年生にあたります。昔よく「教養課程」と言いました。今はそういう言い方はしません。今は「共通科目」という言い方をしますが、いわゆる「教養課程」にあたるものがあつた。「高等学校」または「大学予科」に入学すれば、大学へは原則無試験で入学する。だから中学校から高等学校に入るところ、予科に入るところに物凄く大変な受験競争がありました。7年生の高校は中学校に直接接続しています。女子に関しては、高等女学校が中学相当の教育を行っていた。だから高等女学校というのは、ここでいう中学校の教育であつた。女子が更に上を目指す場合には、主に女子専門学

校に進んだ。だから女子は大学には行ってないのです。これは、もう日本だけじゃない。イギリスなども特にそうで、イギリスの大学というのは元々、神職いわゆる牧師とか神父になるために神学を学ぶところなので女性は入れなかった。これは20世紀の第2次世界大戦が終わって1970年代ぐらいまで、例えばケンブリッジ大学は32のカレッジがありますけれども、32のカレッジが全部どこでも女性の入学が可能となったのは、1970年代に入ってからです。わずか今から50年ほど前です。

現在は言うまでもなく、小学校6年間、中学校3年間、これは義務教育である。最近は中高一貫校ができてきました。この中学校に入学すると、そのまま都立高校に行きます。試験無しで。そういう高校もできてきた。また、中学校と小学校の一貫教育もできてきたんですね。この近くの加住小学校というのも小中一貫校になっています。こうした義務教育を含む制度については、色々手直ししようとしていて、様々な議論がなされてきています。例えば「4,4,4制がいい」と。小学校4年間、中学校4年間、高校4年間の4・4・4で12年間。それが一番言いやり方だというのですね。色々な議論が起こっています。しかし、どうなるかわからない。いずれにしても今、問題が様々な局面に色々散らばってしまっているのですが、ここでもう一回確認をしておきたいことは、要は当時、義務教育は小学校で6年間だということ。問題は、そこからの進学、すなわち中学校へ入る時に非常に大きな門があったということなのです。それからもう一つは、高等学校と大学の予科への進学です。このところにまた別の、大きな門があったということです。これが戦前の状況なので、これを踏まえていないと、次の話に進めません。

「おたとしまさ」さんという方が書いている『名門校とは何か』（朝日選書、2015年）という非常に面白い本がありますが、このなかに牧口先生が校長をやっている頃の話が書いてあります。どういうことかというのと、「戦前の学歴主義、立身出世主義は現在の比ではなかった」とのことです。今私たちは、例えば、名門校に入れば、いい会社に入れるとか、偏差値が高い大学はすごい、という言い方をして受験が行われていますよね。東大行けばこれでもう後は安穩みたいな言い方をしていますよね。決してそうではないと思いますがね。そういうことで、みんな必死になってそれぞれ勉強しているじゃないですか。でも、このおたと先生に言わせると、そんな比ではないと、戦前は。もっと激しかったのだと。勉強さえすれば、出自を超えて出世できる。つまり、当時はまだ身分格差のようなものがあつた。当時貴族もいましたからね。伯爵、男爵、という身分がありましたからね。うちは士族の出だとか、うちは平民だとか言って、ちょっとしたことで争っていたわけで、これはまだ戦前ずっと残っていたようです。でも、勉強して学校に入りさえすれば、そういう身分や出自と関係なく出世できる。親は絶対に自分と同じような思いを子供にさせたくない、と思うわけですよね。だからそれが募ってくると、まさに受験戦争を生じさせるわけです。「多くの親が子どもの教育に夢を託」すのです。そして、「競争は激化した。特に教育熱が高まった大正時代には」、「小学生がノイローゼになる例が出るなど、社会問題化した」（おたとしまさ『名門校とは何か？』朝日新書62頁）のです。

つまり受験が厳しすぎて小学生がノイローゼになる。だから大正時代というのは、僕らが想像

している以上にもものすごい教育の競争が激しかった時代だ、ということです。それを僕らがまず知らないと、牧口先生が『体系』を書こうとした、そのどうしようもない気持ちが、わからない、伝わってこないですね。

もう一つ、これは『全集』第5巻の注記のところにしています。当時の「中学の入学率」についてのデータです。

「中学の入学率（志願者数で入学者数を割ったもの）をみると…大正10年には36%にまで低下、旧高等女学校、実業学校にしても入学率が50%を下回っている。その結果、毎年、数万人の受験浪人があらわれ、入試の失敗による自殺者が相ついだ」（『全集』第5巻、417頁）

「中学の入学率をみると…大正10年には36%」とあります。36%というと100人のうちの36人。だからおよそ、3人に1人しか中学に入れない。一生懸命勉強して受験をして、中学校に入ろうと、一生懸命努力しているのに、結局3人に1人しか入れないということです。「旧高等女学校、実業学校にしても入学率が50%を下回っている」。つまり2人のうち、1人しか入れない。今の大学は、当時からすれば夢のようですよ。全入時代ですよ。希望すれば、嫌でなければ、どこの大学でも入れます。当時の状況は「その結果、毎年、数万人の受験浪人があらわれ、入試の失敗による自殺者が相ついだ」というのです。中学の入学試験に失敗したといって自殺してしまうのですよ。当時はそこまで加熱していたのです。今、受験教育がダメだとか、詰め込み教育がダメだとか色々なことを言っていますが、大正時代や昭和の初期段階とは比較にならないことがわかります。こうした背景もあって、牧口先生は『体系』を書こうとしたのですね。

「1927（昭和2）年には、中学入試における学科試験禁止の通達を文部省が発したほど。代わりに小学校からの報告書、人物考査、身体検査によって選抜を行うよう指示した。しかし情実の介入がみられるなどうまくはいかず、結局2年後には学科試験が復活した」（おおたとしまさ『名門校とは何か？』朝日選書62頁）

昭和2（1927）年には、それが大きな社会的問題となってきたので、中学入試における学科試験禁止の通達を文部省が発した。「代わりに小学校からの報告書、人物考査、身体検査によって選抜を行うよう指示した」のです。いったん入学試験を全部なくしたんです。なんだか今の議論とよく似ているでしょ。すごく似ている。同じことを繰り返しているんですよ、日本は。根本原理は変わらないから。教育の根本原理が代わらないから、同じことの繰り返しなのです。「しかし情実の介入が見られるなどうまくはいかず、結局2年後には学科試験が復活した」。この小学校から報告書の中で、やはり情が入るわけです。先生たちが「この子はいい子だ」とか、「絶対

に入れたい」というように。そういうことになって、いわゆる学科試験、能力とは関係ない、情の部分が入ってきて、結局、客観性と公平性が担保できない。やはりダメだと。やはり学科試験だということで、学科試験に2年間で戻ったということです。大正2（1913）年に『受験と学生』という受験専門雑誌が初めて登場します。我々にも受験雑誌はありましたよね。小学生時代には、『小学1年生』、『小学2年生』『小学3年生』のようなものがあつたり、大学入る時には『蛭雪時代』だったり、高校時代は『高1コース』『高2コース』とかね。受験生向けの本格的な雑誌が初めて、大正2年に出てきます。ということは、それだけ需要があつたということですね。そこまで激しい受験競争、受験の問題があつたということです。そういうことがないと、この牧口先生の発言になってこない。それで、この当時を社会状況をまとめたもの。これは成田龍一さんという人が書いているのですが、以下の通りです。

「第一次大戦後期の社会の変化は…、主として青年たちの意識の変容を背後にもつ。時には都市対農村という対抗的なはあくをとりつつも、人生のコースと生活のスタイルをも変えていく。1902年に創刊された雑誌『成功』には、様々な苦勞のあげく立身を成し遂げた人びとの“実話”が満載されている。同時に、この時期に立身出世のあらたなシステムとしての受験が社会の中に組み込まれた。『受験と学生』（1913年）などといった受験専門誌が登場し「学歴」が言われ、学校を卒業した資格を持つ人びとが、職場に進出するようになった」（成田龍一『大正デモクラシー』岩波新書69頁）

第一次世界大戦が終わった後の社会変化です。第一次世界大戦は大正7（1918）年に終わっていますので、その後はどうなったのかというと、「主として青年たちの意識の変容を背後にもつ」、つまり日本の社会では第一大戦が終わった後に、青年たちの意識が大きく変わってきたのだという分析です。「時には都市対農村という対抗的なはあくをとりつつも、人生のコースと生活のスタイルをも変えていく」。つまり、色々な形で青年たちの意識が変わってきたので、社会全体のスタイルが、徐々に徐々に変わってきた。1902年ですから明治35年ですけれども、「1902年に創刊された雑誌『成功』がある。その雑誌には、「様々な苦勞のあげく立身を成し遂げた人びとの“実話”が満載されている」。どうすれば成功するのかというようなことが、記事になっている。雑誌に載っていたのです。同時に「この時期に立身出世のあらたなシステムとしての受験が社会の中に組み込まれた。『受験と学生』などといった受験専門誌が登場し『学歴』が言われ、学校を卒業した資格を持つ人びとが、職場に進出するようになった」のです。つまり、資格を持つことによって就職が決まっていたということです。こういう状況です。我々の想像するのとちょっと違う感じがしますが、こういうことなんですね。

4. 20 世紀初頭の政治状況

どうしてそうなっていったのか。「20 世紀初頭の政治状況」というテーマで考えていきたいと思います。そもそも、こういった大正デモクラシーという、ちょうど牧口先生が当時生きていた時代が、どうしてあのような時代になっていったのか。そのことを考えるためには、どうしても外すことが出来ないのが、日清戦争と日露戦争なのです。要は戦争なのです。戦争がどうして起こってしまったのかという話になるのです。それを我々はどう捉えればいいのかということです。日清戦争は、明治 27（1894）年の 7 月に始まって、翌 28（95）年の 4 月に終わっています。ですから、19 世紀の一番終わりの時期です。明治政府になってはじめての大きな戦争です。もちろん、明治 10 年に西郷隆盛が中心となって勃発した西南戦争というのがありますけれども、これは、国内の内乱ですよ。そうではなくて、ある種の国際的な関係になってくると、この日清戦争が一番初めなのですが、そもそもの始まりはどこなのかというと、明治 15（1882）年の壬午事変です。その 2 年後の明治 17（1884）年に甲申事変というのが起こっています。これはどのような事変だったのかというと、両方とも朝鮮半島の朝鮮政府内で、中国に付くのか日本に付くのか、ということで物凄く荒れるのです。韓国の人達からこの時代のことを聞くと、面白いことを言っているのです。「上には鯨がいて、下には鯨がいる」。つまり、板挟みだと言うのです。これは有名な話らしい。上にいる鯨は何かというと、中国「清」です。下にいる鯨とは何か。これが「日本」です。だから当時の朝鮮の国というのは、どうもその大きな二つの大国に挟まれて、にっちもさっちもいかない状態だったということです。だから、親清派、中国派は、その青年たちを中国に送って勉強させようとする。親日派は、これは、日本に送って、日本の勉強をさせようとする。その二つの勢力が、朝鮮政府内でうごめいているわけです。その状況下で、清は清で、日本は日本で、その頃の朝鮮半島の政府を自分たちの思うようにしたいものだから、何とかコントロールしようと思って、色々介入をする。親日派はやはり自分たちのやりたいことをやれるように、政府の中で動く。当時は、王朝ですけどね。王朝の中でうごめく。清は清で同じように画策する。それが明治 15 年、17 年と続いているのです。そのなかで起こってきたのが、明治 27（1894）年ですけども、「甲午農民戦争」。教科書には、「東学の乱」とか「東学党の乱」とか出てくるのですが、これは、朝鮮半島の中で、朝鮮政府に対する大規模な農民の反乱が起きました。これは、増税だとか重税だとか、色々な問題があったり、身分的な問題があったりしたようです。非常に農民が酷い扱いを受けている。当時の朝鮮王朝に対して農民たちが「もう我慢できない」ということで、朝鮮政府そのものを「これじゃダメだ、倒そう」といって起こった運動です。内乱ですよ。この内乱が起きてどうなったのかというと、朝鮮の王朝は、まず清、中国に、この乱を収めるために「兵を出してくれ」と、出兵依頼をしたわけです。つまり、自分の国の軍事力では抑えきれない。応援を頼んだ。ところがそれを見ていた日本は、親日派と親清派で争っていますから、清国が兵を出したのであれば、私たちが兵を出さないと、清の言いなりになってしまうぞ、というので今度は日本の第二次伊藤内閣が朝鮮派兵を決めるのです。こちらは別に、朝鮮の王朝から兵を出してくれと頼まれてないのです。でも清が出してきたからというこ

とで、このあたりは、色々な法律や法令、お互いの2国間の間の協定があるのですけれども、そういう形になった。結局これが、最終的に日清戦争に繋がっていったわけです。朝鮮半島に兵を出した清と、それから日本が最終的にぶつかっていきました。

ですから、そもそもの要因というのは朝鮮半島にあるのですね。ここが、火薬庫みたいなものです。今もそうですけれども、東アジアのポイントです。ご存知のように、この日清戦争のプロセスは、色々なことがあった。しかし戦争が始まったら、どうやって終わらせるのかが非常に重要です。戦争というものも、外交の一種ですから。外交の一つの方法ですからね。それで最終的にそれが終わった。終わってどうなったのかというと、これも皆さんよくご存知のように、終了後に三国干渉というものが生じた。独仏露が遼東半島の領地を返還せよという話になった。この問題、この三国干渉というものが、日本人にどういう影響を与えたのかという、これは庶民のほうの問題です。これがすごく大きなポイントになってきます。

さて、ここから午後の時間になります。

午前中にお話したように、牧口先生が、『体系』を書こうとした、あるいは発表しようとしたその背景となる社会的な状況というのを知っていただきたいということで、ひとつは、受験戦争が非常に激しかったこと。我々が想像している以上に、激しい受験戦争があって、それを何とかしたいということが、牧口先生の一つの大きな問題意識だった。

そのほかの部分の問題がまだ多少残ってしまっていて、それは、当時の政治状況、特に戦争に関わることでですね。戦争は特別なことですが、最終的には政治問題です。結局は外交の一貫で、戦争を選ぶか選ばないのか、という話になってきてしまいます。その時日本は戦争を選んだのですね。そして日清戦争は先ほどお話したように、朝鮮半島をめぐる朝鮮王朝の、言ってみれば、中国派と、親清派というのでしょうか、それと親日派というのがあって、その争いから始まって、最終的に国内での動乱が起こり、その動乱を沈静させるために中国と日本が兵を出して、それがぶつかっていったという話をしました。最終的にこれは一応、日本側が勝利したということで戦争が終結いたしました。

問題はそこから色々なことが始まるのですね。

まず、ひとつはこの時に、フランスとロシアとドイツが三国干渉といって、言ってみれば日本が清から勝ち得たという、勝ち得たという言い方はすごく言い方が悪いんですけども、譲渡された山東半島を返さなければいけなくなってしまったということです。ここに日本人としての、国民としての意識というものを大きく変えるものがあって、というのです。最近の研究の成果です。

要するに、すごくたくさんの人達が血を流して、そして得た、獲得したものを、政府が、政府の判断で戻した、返すことになった。勿論、これは政治的な問題で、最終的には政府の判断に伴ってそういうことをせざるをえなくなったわけですが、それに対して国民が黙っていなかったのですね。このままにしておくと、政府は国民の声を代弁することにはならないのではな

いか。そういうふうにも、国民たちは考えるようになった。そこで何を始めたのかというと、これも、僕はまともだと思えるのですけれども、自分たちの声を政府に届けたい、自分たちの声で政府を動かしたいということになり、そこで始まったのが「普通選挙運動」です。選挙を通じて自分たちの意思を伝えないと、政府は自分たちの意思と違うことをやるのではないかと、というようなことがここで起こってきたということです。ですからそれまでは、「御上の言うことは当然だ」と聞いてた国民が、だんだんと様々な教育を受け、あるいは欧米の状況に影響を受けながら、自分たちの意思をきちっと表明すべきだという雰囲気になっていった。そういう要素がこの辺りから出てくるということです。これがポイントになっていくと思います。

その後が続くのは、皆さんご存知のように日露戦争です。日露戦争はどのように起こったのかというと、これもやはり中国と朝鮮半島が大きな問題になっていました。明治 33（1900）年に北清事変が起きました。これを「義和団事変」とも言います。「扶清滅洋」というのをスローガンにして、清国内、中国の中での外国人排斥運動というのが始まりました。このことは中国の視点からのものなのですが、ヨーロッパの各国が好き勝手やってるぞ、自分たちの欲望を、われわれ清国に押し付けてきているぞ、ということで、中国の若者たちも、おおきな反発を持っていて、それがこの義和団という一つの集団になって現れてきました。現れてくるのですけれども、これがだんだんと過激で暴動化していくのですね。これによって逆に、今度は西洋列強が中国の国土の中に軍隊を派遣するという、そうした状況を引き起こした形になってしまいました。それで西洋列強が軍隊を派遣致しまして、それに対応する形で日本も同調して軍隊を派遣するということになります。更にロシアは、今度は大軍を満州に派遣しまして、満州でその軍隊を留め置いたわけですね。事変が収まってもロシアは軍隊を、撤兵しなかった。そのことがあって、だんだんとキナ臭くなっていく。朝鮮の政府内でも今度は、前は親清派と親日派だったのが、今度は親露派と親日派の対立ということになって、朝鮮はどっちへ着くのかとこういう話になってきた。これについても、色々な研究がありまして、結局ロシアは、どうしてもやはり南下したかった、ということになるそうです。「凍らない港がほしい」ということで、強烈な欲求があったということです。ある研究者の本を読むと、どちらかと言うとこの日露戦争については、日本もあまり積極的ではなかった。積極的とはどういうことかということ、「もう戦いたくて戦いたくて仕方ない」ような好戦的な話では全然なく、「むしろ避けたい、ロシアとの対立は」というような証拠がいくつか出てきてまして。どちらかと言うと熱心だったのは、ロシアのサイドだということです。これが最終的に、戦争の形になっていきました。日露戦争は明治 37（1904）年 2 月から翌 38 年の 9 月にわたって起こった戦闘状態です。日本政府は朝鮮半島の安全保障の観点を掲げまして、戦争に入ってしまった訳です。今言いましたけれど、最近の研究では、ロシアサイドのほうが開戦に積極的で、日本は戦争を避けようとしていたということです。しかし、中にはいるんですよ、日本にも。「戦争やろうやろう」って叫んでいた人達が。東京帝国大学にの教授たちが率先して、「ロシアと戦うのだ」と言っていた。7 人の教授たちがそういう運動を起していたという事実もあって。だから、わからないですよ。学問をしている人が、こうしたことを言い出すのです。色々

なことを言う人がいるということですよ、やはりね。後から見て僕たちは、なぜ好戦的なことを言っていたのだらうと思うわけですが、どうもこの当時はマスコミもかなり好戦的で色々なものを読んでみたらですね、新聞社がやはり戦争を煽るところがあるのですね。どうして煽ったのかというと、完全にこれは営業の問題です。新聞が売れる。好戦的な新聞のほうが売れたということです。「反戦だ。反戦だ。戦争してはいけない」といっていた新聞は、どんどんと発行部数が減っていく。これはどこに原因があるのかというと、やはり国民に問題があるわけです。国民がそういうものを好んでしまうという。どうしてそうなっていくのかというと、やはりこれは牧口先生がおっしゃったように、最後は教育の問題です。何を基準にものを考えるのかということです。

結局、戦争になりました。有名な戦闘がありましたね。例えば203高地の闘争だとか、日本海海戦。こうした、戦争のプロセスはどうでもいいです。最後は、もう日本も経済的にもたなくなって、アメリカに仲介を頼んで、何とか終戦をまとめてもらった。その点もですね、ロシアとの間での条約を結ぶところも、色々和本を読んでいきますと、やはりロシアが上手いのです。最後交渉で、交渉にあたったロシアの高官が最後終わった時に、「勝った！」と言ったというのです。やはり交渉ごとで、賠償金も払わずに済んだ訳ですし、そういう意味で、色々なことが後からみるとわかってくるのです。この前後の話は、やろうと思えばいくらでも1日でも、2日でも3日でもやれてしまうテーマなのですけれども、それは置いておきましょう。

私たちのテーマは、「牧口先生がどうして創価教育学体系を書いたのか」ということがポイントですので、話がずれていってしまったのですが、日露戦争の結果どうということが国内で起こったのかということにまず焦点を当ててみます。

一つは、戦争による増税です。もともとロシアと戦争するだけの経済力がなかったわけですから。高橋是清が一生懸命ヨーロッパに行って、債権を買ってもらい、それで戦費を獲得してやっと戦争が始められた。こうした裏話、これは皆さんよくご存知だと思いますけれども、こういうことがあって、これ以上戦争続けたら、破産するということまで日本は行っていました。国内ではどういうことが起っていたのかといえば、要するに国家自体が破産寸前ですから、当然国民から血の出るような、税金をもう徹底的に搾り取るというような形で、1年に2度の納税を要求する。税金は普段であれば1回で済むのに2回税金を払うというぐらいの増税です。つまり2倍です。そういうような状況だった。それからもう一つはちょうど日清戦争が終わって、日本は戦争を通じて感じたことは一体何かというと、軍備を近代化しなければいけない。装備をもっとよくしなければならぬ、ということになったのです。そのために、様々なものを作りました。産業的には色々なことが起こってきます。例えば、一番有名なのは八幡製鉄所です。これを作ろうとなっていく。これが象徴的ですけども、様々なところで工場を作り、積極的に綿織物を海外に輸出するとか、そういう形での工場がどんどん増えていったのです。工場が増えていったのですが、そこで働いている人達の状況、働いている人達の待遇、これは、悲惨なものです。細井和喜蔵『女工哀史』（岩波文庫）という本がありますけれども、それを読んでみてもいいですし、最近では『わたしの「女工哀史」』だったでしょうか、その『女工哀史』を書いた細井の奥

さんであった高井としをさんという方が、自分の人生を振り返って記された本が出ています、岩波文庫から。こうした本を読むと、やはりすさまじいのです。食事は酷いし、12時間労働といった、今から考えると本当に悲惨な状態です。その中で、やはり出てくるのは、「人間なんだから、人間としての待遇をちゃんとしてくれ」という話なんです。そうするとそれは、どこに結びついていくのかというと、社会主義運動に結びついていった。当時出てきたマルクスの話などは、やはり労働者のほうからすると、本当に藁でも縋りたいような状況ですから、それに飛びついていくわけです。各工場でもストライキが起こったり、労働運動が起こったりしていきます。社会主義運動が拡大をしていきます。これについては、理解を示す政治家もいるし、弾圧しなければいけないという政治家もいます。やはり、意見が対立するのです。一方的に、何か戦前の政治家は、皆、超保守的で、そういう運動も全部弾圧していったと言いますが、そうでもない。やはり両方いるのです。意見が色々と対立するわけですが、それはともかくとして、社会主義運動が拡大していくというのはこの時期です。それから、選挙権。これはまた更に広がってきまして、選挙権がちょうど、この日清戦争の前の2倍に拡大していきました。そうすると今までお金持ちの味方、お金持ちの人達、高い金額の税金を納めた人達しか議員になれなかったのに、それがだんだんとそうではない人達も対象となるので、政治の状況が変わってきます。つまり、議員の質が変わってくる。地主だとか大企業の社長さんたちを守ろうとする議員だけではなくて、一般の庶民の声を聞いて、それを政治に反映しなければいけないと考える議員の人達も増えてきます。その意味で議員の質が変化するということになっていきました。

この辺りの経緯については、僕が勉強した本では、加藤陽子さんが『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』という本を書いています。朝日新聞社、2009年刊です。この本は、興味ある方は読んでみてもらいたいのですが、加藤陽子さんは東大の近代史の先生です。この先生が神奈川県に栄光学園という高校がありまして、その高校に歴史研究部というのがあるそうです。この歴史研究部の生徒たちが、研究会を開いてそこに加藤さんが行ったそうです。高校生を相手に、近代史を語ったのです。これが日清戦争、日露戦争から始まって、日中戦争、それから第一次世界大戦、日中戦争、第二次世界大戦と、高校生にわかりやすく5回の講義をした。説明をして、講義の終わりの度に、高校生と議論をしたのです。高校生に対して質問をする。答える。高校生はまた加藤先生に色々なことを聞く。こういう形式ですので、非常にわかりやすい。この本を読むと、この戦争をどう考えれば良いのかということがよくわかります。結局この本のタイトル通りで、「それでも日本人は戦争を選んだ」のです。その時は選んでしまったのです。それはどうしてなのかということをやはり考えなければいけない。そうしないと、「平和！平和！」と叫んでいるだけでは、平和には絶対ならないから。創立者が評価されているのは、平和をただ叫んでいるだけではなく、自らが動いているからですね。先程の「知行合一」ではないですか。平和は理想です。これは理想であることは、誰でもわかっている。けれども、その理想を実現するためにどうしたらいいか。これがないと全然意味がないですね。それと同じことが、だんだん色々ところで語られ始めてきているわけです。それがすごく重要だと思います。いずれにしても日

清・日露の戦争がありました。

それから今度は、第一次世界大戦等があった。このように世の中は動いていきます。こうした動きのなかで、牧口先生は何をしていたのかということ、校長先生をずっとしていました。校長先生というのはいつも言いますように、国家公務員です。ですから、国家のある種の方向性に合致したような話もしなければいけないし、合致した教育もしなければいけない。その中で色々なことを実際には考えていたわけです。ちょうどこの頃、白金小学校の校長先生で、牧口先生の人生のなかでは、最も充実した時間を送っています。それでも、その白金小学校にいて、実際に自分が教育現場に立ってみて、経験的に、こうではないか、ああではないかと感じていて、それをメモのようなものにずっと書き続けていたというのです。このメモというのが、牧口先生は明治時代のお生まれですので、非常に「もったいない精神」が強い方で、家に届けられる新聞に挟み込まれた広告紙。昔の広告は一色刷りですから、片面だけ刷ってある。だから裏は、何も書かれていません。これを利用していたというのです。書齋に積み上げていて、その広告の裏をメモ用紙にしていたというのです。ここに考えたこと、思ったこと、読んだ本の抜き書き等々を書いて、それが積み上がっていく。それをまとめてみようというのが、そもそも『体系』の始まりだったようなのです。

5. 創価教育学支援会

この頃になると、だんだんと牧口先生の名前が、東京の中で浸透していきました。そのなかで、実は今日お話ししたい「創価教育学支援会」が立ち上がっていきます。「創価教育学支援会」が、どのようにして初めて世の中に出たのかということ、実は戸田先生の『推理式指導算術』という書物が関係しています。この本はご存知だと思いますが、算数の参考書で、戦前の受験参考書としては、トップレベルの売れ行きだったというのです。これは、話がずれますけども、本学の理工学部教授で数学の研究者である北野先生がいます。この先生は東工大を出て数学をずっとやっていたのですが、北野先生の先生がいるのです。この先生、北野先生の先生というのは、東大の先生で日本数学会の会長をやっておられた先生です。その先生が高校時代に教わっていた先生がいるのです。この北野先生の先生の高校時代に教えてくれていた数学の先生が、これ面白いからやってみたらといって手渡したのが、『推理式指導算術』だとのこと。「夏休みこれ一冊やってみたら」と。それで数学が好きだったから、その先生は『推理式指導算術』に飛びついたというのです。やってみたら、ものすごく面白い参考書で、2分か3分やれば解ける問題もある。ところが1時間、2時間かかっても解けない問題もあるというのです。それで、夏休み中『推理式指導算術』にのめり込んで勉強した。「そういう経験があるんだよ、北野君、君は今度創価大学行くんだってね」と、「創価大学というと戸田城外という人が関係しているよね。その人の参考書で、僕は高校時代こんな勉強をさせてもらったんだよ」という話を北野先生にしたというのです。当時、算数や数学が好きだった人は、この『推理式指導算術』に巡り合っている場合が多いようです。そのくらいの参考書です。もっと、僕らの時も出ていれば、もう少し数学が出来るよ

うになったはずなのに、などと思うのですが、本当に惜しいなという感じです。すごく面白いらしいです。数学が好きな方から言わせると。

この『推理式指導算術』の初版の奥付を見ると、発行所が「創価教育学支援会」となっています。これが「創価教育学支援会」の初出です。この本は、昭和 5（1930）年の 6 月に発刊されている。『創価教育学体系』が昭和 5 年の 11 月 18 日の発刊ですから、それよりおよそ 5 カ月ほど前、およそ半年ほど前に出版された本。その発行所の箇所に初めて「創価教育学支援会」がでています。そういう会がこの本を発行する母体として存在していたのです。この『推理式指導算術』は、表紙はこのタイトルが書いてあるのですけれども、背表紙にはこういう言葉が、印刷されています。「創価教育原理に基づく推理式指導算術」。まさに、ここで初めて「創価教育原理」という、この「創価教育」という用語が踊り出てくるわけです。

昭和 8（1933）年発刊の『推理式指導算術』第 16 版までが、「創価教育学支援会」の発行です。17 版以降はどうなっていくのかというと、「日本正学館」の発行に変わります。この「日本正学館」は、戸田先生が自分で経営をしていた出版会社ですが、ここの発行に変わっていきます。ただし 16 版までが支援会だということで、この支援会というのは一体何だろうということになります。

この支援会がどのような形で組織化されていったのかということを少し推測するためのいくつかの叙述がありますので、それを見てみましょう。まず、第一に指摘できるのは、これは、『第三文明』に連載中の「創価教育の源流」の論文に拠っていますけれども、『創価教育学体系』の第一巻の叙述「緒言」、さき程の「序」ですね。「はじめに」の部分に、

「偶々（たまたま）同志の青年諸君が自分の如く心配し、この事業の為め後援会を設けて精神的の援助をなし」（『全集』 5 巻、8 頁）

という一文が出てきます。つまりこの「青年諸君が自分の如く心配し」というのは牧口先生が一生懸命その本を出そうとした。書いて世に問おうとした。そういうことを自分のように、青年つまり牧口先生のことを慕って集まった若い人達が、一生懸命自分のことのように心配して、その出版の事業を応援しようということで、この後援会を作った。そして、ここに記されている「後援会」が、実は「創価教育学支援会」になっていく。ここが一つの裏付けだということですね。『教育週報』という当時、学校の先生たちが読んでいた教育雑誌がありまして、その 303 号、1931 年 3 月 17 日発行ですから、これは『体系』第 1 巻が発刊されてから、およそ半年後です。『体系』をどう評価するのかということで、様々な教育関係の研究者たちがこの『体系』を読んで、色々なことを言っていた。その時に出ていた『教育週報』では、

「君はよく後進の長所を認めて之を引上げる。従って後進もその情誼に感じて君に尽くす事を忘れぬ。『創価教育学支援会』の如きその現れの一つである。希くは、君をしてその望む所を存

分に遂行させたいと思ふ』『教育週報』（第303号、1931年3月17日発行）

出所）塩原将行「『創価教育学』誕生の時期をめぐる」（『創価教育』第4号、206頁）

という一文が載っています。「君は・・・」というこの君は、牧口先生のことです。これは本学の創価教育研究所の事務長をやっていた塩原さんが見つけて下さり、「『創価教育学』誕生の時期をめぐる」という論文の中で紹介してくれたものです。『創価教育』というのは、創価教育研究所で毎年一冊発刊している紀要です。「創価教育研究所」は、創価大学付置の研究所になっているのですが、それを文部科学省に認定してもらうために、年に一回こういう研究成果を公表することが義務付けられているのです。だから毎年一冊、最低でも一冊、作らなければいけないきまりです。最低でもと言いましたが、これが限界です。もっと出したいと思っても、なかなか時間がなくてやっとのことで一冊出しています。今年までは紙ベースで作っていますが、本年度の発行から電子文字版になります。本学の中央図書館に大学の研究業績を集めている「リポジトリ」というものがネット上におかれており、こうした紀要類が全部そこに掲載されるようになります。これから多分皆さんも自由に、こうした成果を見られるようになると思います。

さて、「創価教育学支援会」というのは、この後進の人たち、若い人たちによって作られた。しかし、若い人達が色々な経済援助ができるかという、そんなはずもない。それがだんだん広がりをもっていったわけです。この「創価教育学支援会」の趣意文というのが、『環境』という雑誌に掲載されています。この『環境』というのは、教材研究のための雑誌です。1930年の11月発行ですから、ちょうど『体系』が出たその月の雑誌です。そこに、「創価教育学支援会」の趣意文が載ってまして、「賛 創価教育学」というタイトルです。その趣意文とそれから賛同者の名簿が載っています。

「牧口常三郎氏が教育に対する卓抜なる識見と熾烈なる努力によってなされた功績は已に周知の事に属し、今更贅言（ぜいげん）を要せぬ所であります」

^{ぜいげん}贅言というのは、余計な言葉という意味です。だから、牧口常三郎氏が教育に対して、卓越した知識と、強烈な思いや努力があってなされた功績というのは、既に皆さんご存知の通りでしょう。だから今更それを敢えて言う必要はないと思います、というような趣旨になるかと思えます。

「東京市白金小学校が今日の如き優秀なる成績を挙げたのも、実に其の一端を物語るものでなければなりません」

白金小学校の生徒たちの成績が、グングンと上がっていったようです。白金小学校が名門になったのです。牧口先生が白金小学校の校長になって9年間の間、すなわち校長職に就いている間に、白金小学校が当時の東京市の小学校の中では模範的な小学校になっていったのです。この

一文は、そのことを指しています。

「氏や人格高潔、紛々たる世間の利を趁（お）ひ、榮を求むる裡（うら）にあつて、よく君子の樂を得られ只管（しかん）教育に献身の努力をなさるゝ所、当世稀なるものといふべきであります」

これはもう、牧口先生の人格、人柄をずっと書いていますのですけれども、世間で言われるところの営利だとか、それから誉め言葉だとか、そういうものを追いかけるのではなくて、ただただひたすらに、自分の目指すべき目的を達成するために献身的な努力をずっとしてきている。これは、「賛 創価教育学」ですから、もう牧口先生を讃えて讃えて讃えまくっている訳です。

「其の日常繁劇の間に処して研究倦まず不断の思索、貴き体験、之をめぐらし、之を積んで其の独自の教育体系の完成に肝胆を砕かるゝ、道に篤き事、到底儕輩（せいはい）と日を同うして語るべきではありません」

牧口先生は、日常生活の中で研究をずっと続けていて、絶えず思索をして、そして体験をして、考えて、それを蓄積して、教育体系の完成を目指していった。その道に対して、非常に熱い思いがあり、真面目であつて、そういうものは「到底儕輩」つまり「一般の人々と日を同じようなことで語ることは出来ません。人並みとは違うのです」と言ってるわけです。これは、既に歴史上の牧口先生という人を信じて、すごい人だなどと思っている人が言っているのではなくて、当時の青年たち、あるいはその周りにいた人達がこういうように言っているところが興味深いところです。最後の箇所になります。

「其の功績を慰藉（いしゃ）し、其の人格を欽仰し更に其の貴重なる教育体系の完成の努力に敬意を表するために、精神的後援をなすことは士を待つ礼であり、之即ち氏を知るものの徳義でなければならないと思はれます。これ先生の創価教育学説の樹立に対し支援会を興し、敬意と後援とを捧ぐる所以であります」

こう結ばれています。こういうような先生を讃え、さらに私たちは色々な形で精神的にも応援していきたい。だからこそ「創価教育学支援会」を私たちは作るのだ、ということでもとめられています。この文の下に書いてあるのが、「創価教育学支援会」を応援するという賛同者たちの一覧になっています。総計 28 名です。この方々を、みてみましょう。

まず、政友会総裁の犬養毅。これは皆さんよくご存知ですよね。総理大臣になって、後々五・一五事件で暗殺されたのですが、犬養毅は『創価教育学体系』初版の発刊時に、本の扉と表紙の間に、自分の筆で創価教育学を讃える一文（「天下に教う可からざるの人無く、亦以て教えざる

可きの人なし)を書いています。このことは、ご存知の方も多いと思います。そして、太田政弘。それから新渡戸稲造、古島一雄ですね。先程も出てきましたね、古島一雄さん。この方の肩書きは「前通信政務次官」。それから中野正剛、前田米蔵、そして前田多門。この人は「東京市助役」です。それから、次に柳田國男が出てきます。「前貴族院書記官長 柳田國男」。それから「前文部大臣」の水野錬太郎。この人も政治家として名前が通っていました。それから政治家だけではなくて、実業家としては、「三菱総理事・太平生命取締役江口定條」です。こういう人達も、この支援会に入っています。そうそうたるメンバーです。それから最後の箇所、記載されているのが「帝国大学教授・医学博士高木逸麿」、「海軍大将 野間口兼雄」、「実業者改造社長 山本実彦」。このような人達が、「創価教育学支援会」に名前を連ねています。『環境』第1巻の第9号の奥付をみると、「昭和5年11月20日発行」となっています。つまり『体系』が出された前後です。これが「支援会」ということは、どうですか皆さん、疑問に思われませんか？「昭和5年11月18日」に「創価教育学会」が創立されたのですよね。ところがこれをみると「昭和5年11月20日」に「創価教育学支援会」ができています。どっちが先なのでしょう。支援会が先だとすれば、11月18日はどうなるのでしょうか？午前中に申し上げましたが、宗教団体が一つの運動論として、ここが原点だ。だから「ここが創立記念日だ」と言うのは全然構わないのです。しかし、科学的に、実証的にやっていくとこういうことになるのです。

さて、もうすこし牧口先生の動向を追いかけてみましょう。牧口先生は明治4(1871)年6月6日に生まれました。しかし科学的に言うと少し考えなければならない。何故かと言うと明治4年はまだ旧暦です。日本では太陰暦です。この日は、僕らの使っているグレゴリオ暦、太陽暦で言うと、7月23日になります。明治5年12月3日が明治6年1月1日になりました。だから今でも使っている旧正月とかが旧暦の正月になって、1ヵ月遅れるわけです。逆に言えば、私たちの暦は、1ヵ月早まっているのです。だから暑いのに立秋だということです。「暦の上では秋になりました」。秋ではない、という感じですけれど、こうした言い方をします。だから旧暦の6月6日は、実は7月23日になるという話ですが、これは閑話です。

さて牧口先生は、北海道師範学校に行って、それでその後どうなっていったのか。ちょうど明治42(1909)年、20世紀初頭です。2月2日東京市の富士見尋常小学校の主席訓導に就任しています。この頃はまだ主席訓導ですから、一般の先生の中ではトップクラスですが、校長ではありません。主席訓導として働いています。ただし、牧口先生はこの段階で、すでに物凄く教育熱心で、自分の体を壊すくらいに働いてしまうのです。途中、体を壊しまして、明治43(1910)年4月23日に富士見尋常小学校を退職致します。つまり、教育現場から離れるのですね。現場は大変なんです。受験戦争とか色々なことがあって。それで牧口先生どうしたのかというと、8月6日に今度は文部省の図書課勤務を任命されます。学校の先生は、いってみれば文部官僚、文部省の役人ですから、遊ばせておくわけにはいかないということで、それで図書課に勤務を移します。ここで何をしたのかというと、地理の教科書を作りました。先程文部省で教科書を統一するという話をしました。ちょうどその時期に、地理教科書の編纂に当たっています。

それから翌年の明治 44（1911）年の 8 月。1 年後ですが、今度は、文部省ではなくて、農商務省・農商務省の嘱託として九州へ「山村生活実態調査」に出かけていきます。一応、文部省に席を置いてあったのですが、実際に地理の先生で、地理の教科書などを作っているから、地理に関係する研究をやってもらおうということで、農商務省の嘱託にその席を移す。この時に出かけて行ったのが、8 月下旬になりますが、現在の大分県津江というところですよ。前津江村です。前津江、中津江、上津江という三つの村を総称して「三津江」といいますが、そのなかの前津江村というところに行っています。それから今度は熊本県の村に行く。各地の該当村の役所に、牧口先生が訪問した日誌が残ってしまっていて、そこに名前が出てくるのです。「農商務省嘱託」なのですが、実際には文部省と書いてあります。「文部省嘱託、牧口常三郎君来村ス」と。こう載っています。この津江を出て、熊本県の南小国村、北小国村というところを歩いています。この時に柳田國男に葉書を送っていますよ、そうした資料も残っています。

この頃に地理学者として、色々なところを歩き回っていて、その中で書かれた論文が、やはりだんだん評価をされていく。そういうような段階です。これが 1911 年です。1913 年、大正 2 年ですけれども、4 月 4 日に、牧口先生は東京市の東盛尋常小学校第 3 代校長に就任致しました。この大正 2 年からが牧口先生の校長生活が始まっていきます。それまでは一般の教員、一般の官僚だったわけですが、ここからが校長生活です。大正 11（1922）年 4 月 15 日に東京市の白金尋常小学校の校長に就任致しまして、先ほど申しましたように、在職 9 年、昭和 6（1931）年 3 月まで東京の白金小学校の校長をやり、先程の支援会の「賛」に出てきましたけれども、白金小学校で教育成果を挙げていきました。

ちなみにこの白金小学校時代の逸話は色々ありまして、ご自分の三男で洋三さんという方がいますけれども、洋三さんのお嫁さんである貞子さんは、白金小学校の時の、牧口先生の教え子です。小学校 6 年生の女の子みて、自分の息子に嫁として合うというように思っていたようです。その子の個性を見抜いているのですね。貞子さんが小学校を出て、18 歳になった時に、牧口先生が貞子さんの実家に行って「貞ちゃんをお嫁にほしい」「うちの洋三の嫁にほしいんだ」と言って親御さんと折衝したのですよ。そうしたら親御さんは、稲葉さんというお家なんです、「いえいえ、うちの貞子はまだ何にも覚えてません。18 歳ですから」「お料理も裁縫も何も出来ません。とてもとても先生、勘弁して下さい」と言った。牧口先生は「いいんだ」と。「全部私が教えるんだ」と言って貞子さんをお嫁にもらってしまったそうです。牧口先生は、在職 9 年、昭和 6 年 3 月までこの白金小学校の校長をしておりました。

さて、この間に『創価教育学体系』を発刊をするのですが、実はその前に『創価教育学大系概論』（以下、『概論』と略記する）という、ガリ版刷りで、本文 36 ページの小冊子が配られています。それが残されています。これは『牧口常三郎全集 第 8 巻』に載っています。それから「レグルス文庫」という第三文明社から出ている文庫の中の一冊として発刊されていますが、これは古川敦さんが解説を詳しく書いてくださっています。この『概論』には奥付がないんです。つまり、発行日とか著者名が書かれていないのです。ただ発行所だけは、「創価教育学支援会」

という名称になっています。そこで、これが何時発行されたのか、という点について塩原さんとも議論したのですが、昭和5(1930)年、ちょうど、戸田先生の『推理式指導算術』(以下、『指導算術』と略記する場合がある)が出たのが6月ですから、その以前に出ていたはずだ。色々な中身からみて、恐らく4月か5月だろう。『指導算術』の発刊が6月ですから。そして、『体系』が11月ですから。この『概論』は関係者に配布された、非売品のものだったというのです。そもそも『体系』は5巻の構成で、一巻ずつ5回に分けて発刊する予定でした。しかし結果的には、4巻までしか出なかった。これは色々な事情があったと思われます。本当は5巻目が出るはずだった。その5巻目が出なくて、先の話になりますけれど、昭和10年代に「創価教育学会」が発行していた教材の研究のための雑誌で、『新教材集録』という雑誌がありました。それがその後『新教』というように、タイトルを縮めて出版された。その創刊号に『体系』第5巻で発表すべき牧口論文が載っている。ややこしいですね。わかりましたか。本当は『体系』は全5巻だったけれど、4巻しかでなかった。最後の5巻分は、その『新教材研究』の発展した雑誌『新教』に発表された。そこにしか発表する場所がなかったのです。この雑誌がなかなか手に入らなくて、本当に困りました。雑誌って、なかなか手に入らないのです。皆さんも雑誌は、ほとんど取って置かないですよ。普通の刊本だったら取って置くけれど、雑誌は、だいたい捨てるじゃないですか。ましてや毎月毎月出てくる雑誌は取っておくことはしないですよ。どんどん量も増えて、置き場に困ってしまう。だから片っ端から捨てられてしまうのです。だから雑誌がなかなか集まらない。『新教』もやっと2年前ぐらいに手に入ったのです。必死です、集めるのが。もう何人も目が皿のようにして毎日色々なところで探しまして、ようやく手に入った。今後は、これを分析しなければならないのですが、その5巻分の構想が、全部ここに書いてあるのです。『体系』の骨格が全部、『概論』に示されているのです。だから推測できることはいくつかある。おそらく筋が通った推測、これが正しいかどうかわかりませんが、以下はあくまでも推測です。先程お話ししましたように『体系』を作成するときの前提として、牧口先生が実際の教育現場で感じたことや思っていることや、こうした方がいい、ああした方がいいというアイデアを、メモのようにして書き残していたという話をしました。それをまとめなければいけない。どうやってまとめるのか?何かストーリーというか筋道が決まっていなかったらまとめようがないでしょう。例えば第1章、第2章、第3章、第4章と置いておいて、そのメモを見て、これはここに当てはまる、これはこっちの章だ、という分配方式のようなことを本人がやるか、あるいは誰かそういうことをよく知っている人でやるしかないでしょう。では、そのストーリーの筋立てはどうやってやるのでしょうか。誰が書くのですか?そうなることは牧口先生自身がそれをきちんと整えて、編別構成というか、柱立てをしておくしかありませんね。すなわち設計図にあたるもの、それがこの『概論』じゃないだろうか。筋立てをみて、その『体系』の発刊をめざして、「一緒に皆でやろう」と。支援会の人達、若手の人達もそれに基づいてメモを配置して、それを一冊一冊にきちんとまとめていったのではなからうか。これは、牧口先生のお弟子さん、または戸田先生と同僚の方等が色々初めの頃に手掛けているのですが、それがなかなか上手いかな

くて、最終的に戸田先生が「じゃ俺がやる！」と言って、3巻までは戸田先生がその作業をやった。このことは、戸田先生がご自分で語っておられるのですね。だから『概論』がないと出来ない。こういうような背景から、関係者に配布されて一般に売られるような物ではなくて、非売品で、なおかつガリ版、手書きのガリ版で、こうした作業を通じて、『概論』が発刊されたのではないかと考えました。

こうして『体系』の発刊に向けて、様々な準備が進んでいった。この場合には、まだ1巻です。5巻出す予定で実は4巻しか出なかったのだけれども、この段階で出さなければいけなかったのは1巻目だから、1巻目の筋立てだけでできていれば何とかなる。発刊時はそれですむのですが、『概論』には、全5巻分の筋立てができています。興味がある方は、ぜひとも読んでみて下さい。

実は『創価教育学大系概論』と、『創価教育学体系』のタイトルの差異が次の問題です。『概論』は「大系」、「大きな系」と書いてある。ところが11月に発行された『創価教育学体系』は「体系」、「体の系」です。この違いが、わずか数ヶ月の間に起こっているのです。「『大系概論』は、牧口の創価教育学の書名が最初は『創価教育学大系』と考えられていた事を示している」のではないかというのが、塩原説です（塩原将行「『創価教育学』誕生の時期をめぐって」、『創価教育』第4号）。「それもある程度長い間であり、『体系』出版の直前までとも考えられる」というのです。だんだん推理小説を紐解くようなことになって来ましたが、この辺りが歴史の研究としては面白いところなのです。ガリ刷りのほうは「大系」です。大きな系。ところが「創価教育学体系」のほうは、体の系ですから。どう違うのか、という話です。もう一つ「1930年、6月に出版された……」これ先程のですね、「……『指導算術』の『序』」を牧口が書いているのです。この肩書きはどうなっているのかのというと、「大系著者」になっているのです。大きな系の著者になっている。それから「『創価教育学大系著者の立場にて』として、創価教育学樹立の動機についても述べている」。だから、いずれにしてもこの、指導算術が出された時の牧口先生の肩書きは、「大系の著者」、この大きな系の著者というように書いてあるのです。まずこの事実。これは塩原さんと話していて「面白いね」ということになりました。

『体系』出版前の変化です。『大系』から『体系』に書名が変わった。これは大きな変化といえるのではないのでしょうか。実際の意味はどう違うのでしょうか？それで『広辞苑』を引いてみました。まず「大きな系」のほうの「大系」です。

「大系：一つの主題のもとに、主要なものを系統だててまとめた叢書の類」。

こうなっている。一つの主題のもとに、主要なものを系統立ててまとめた何冊かの本という意味。これが大系。だからこれは、例えば僕らがよく使っている『国史大辞典』などは、この「大系」を使い「国史大系」などといいますけれども、そのような時に使う。では、「体の系」はどのようなのでしょうか。

「体系：一定の原理で組織された知識の統一的全体」

「一定の原理で組織された知識」、これの全体を指す。何がどう違うのかよくわかりませんね。ただし、一つの主題の元に色々なものを集めたのが大系、「大きな系」である。「体の系」は主題が決まっています、その知識全体を指す、というように言われている。ニュアンス的には、違いがわかりますよね。だから牧口先生ははじめは「大系」として考えていた。一つの主題の元に主要なものを系統立てて集めてくる、というように考えていた。しかし、ちょうど出版の直前に、いやそうじゃないぞ。一定の原理があってその原理から発せられた様々なもの、それをまとめたものだ、というように考えて、その書名自体を変えた。前にも言いましたが、これが正しいかどうかかわからないですよ。いいですか。これを信じて色々なところで言われても困るのですが、これはあくまでも一つの考え方、ものの見方です。事實は、「大系」が「体系」になった。「大」が「体」になった。

これは何か変化があった。変化がなければ、こういう書名の変更とか、まして況や、自分で戸田先生の本には、「大系の著者」と書いておいて、半年後の発刊の際には『体系』としているのは不可解です。だから、どこかで何かが変わったはずなのです。

2つ目の変化がみられます。『体系』出版前の変化の2つ目は以下のことです。『指導算術』では「創価教育学支援会」が発行元だった。ところが『体系』の第1巻では、「創価教育学会」になっている。初めて「創価教育学会」という名前が、この段階で確かに出てきている。『指導算術』は昭和5年の6月発刊。これは発行所、「創価教育学支援会」。11月18日の『体系』では、「創価教育学会」発行。ということは、この6月から11月の5カ月の間に、「大きい」は「体」に変わり、「支援会」は「学会」に変わったということです。さあ、この昭和5年は大変なことになってきます。書名の変更と、発行所の変更が行われたのは、従って、昭和5年の凡そ7月から10月までの期間で行われたのではないか、というのが塩原説。僕はそれに対して今、反論はない。反論は持ち合わせていない。多分こうなのだろうと思います。他に事実として確認出来ないから。結構推理小説みたいになってきて、他の人が見たら、だからどうしたという話なのですけれど。そんなことが解明されても、根本的な原理は変わらないじゃないか、と言われたらその通りです。しかし、こういう変化があったということは、事實なのですよね。

では、この「創価教育学支援会」と「創価教育学会」というのは、何がどう違うのか。この違いに着目してみようというのが、次の話なのです。

先程、「賛 創価教育学」の中で出てきました、犬養毅を筆頭とする人達が11月に出した「賛」の中の「創価教育学支援会」というのは、正にその「創価教育学」の出版とそれに基づく活動を支援する会なのです。これは、第1巻が発行された11月に出来た。しかし、『創価教育学体系』それ自体は、全5巻を予定していたわけです。ということは、何もかもが1巻の5倍かかります。特に経費は。そうするとそれを支援する会、というのが『体系』の発行と共に、きちんとした形で設立されたということ。これは別におかしくはない。しかし、『体系』は、「創価教育学

会」の発行です。これは正に「学会」です。これは「学術学会」を指しているのではないか。むしろ、当時の学会というのが、僕らが想定しているような「学術学会」なのかというと、これには議論が残ります。その頃には、それほど多くの「学会」はできていません。だから僕らと同じ感覚で言ってしまうといいのかわからないのですが、いずれにしてもその趣旨としては、「創価教育学に基づいて、それを研究・実践する会」だということになるはずで、少なくともそれについて研究する会だと、捉えられる。最も大きな違いは何かということです。この2つの会は、片一方はその活動を支援する、応援する会。もう一つは、自分たちが中心となって研究する会。この学会のほうはむしろ自分たちがそれを研究するということです。

さてこの後者、すなわち「創価教育学会」に重点を置いて考えてみましょう。「創価教育学会」と言った時に、これはひとつは「創価教育の学会」という捉え方が出来る。それからもう一つは、「創価教育学の会」。

前者は、「創価教育とは何か」ということを研究する、そういう学会ということになりますね。「創価教育」の「学会」とここで切ると。これを後者のように「創価教育学の会」としたらどうですか？これは、「創価教育学」というものを実践し、それを追及する会だということ、そういうグループだということになりますね。根本的に違ってきませんか？この問題提起は塩原さんのものです。僕もものすごく面白い問題提起だと思って一生懸命考えているのですが、果たしてどっちが正解なのかはわかりません。ただし、ここで考えられることは、一体何かというと、「創価教育の学会」ということになると、「創価教育とは何か」ということを学問的に追求するということです。そうするとこれは理論、理論的な問題ですよ。理論追求の学会です。「創価教育学の会」ということになると、これは、実践ですね。「創価教育学」をどうするのか、ということになる。ここで、一番はじめの「知行合一」の問題が出てくるわけですよ。牧口先生が提起をした、「知」なのか「行」なのか、あるいは、「知」と「行」を合体させるものなのか。こういう問題が提起されてくるわけです。「いや、違う。分けちゃダメだ。ある時は『創価教育の学会』である時は『創価教育学の会』なんだ」と、こういう使い分けだって出来ますよね。知行合一という考え方からいったら分けてはだめ。「その時に都合のいい方を使って」かまわない。そういうことになりかねない訳ですよ。

そうするともう一步踏み込んでみましょう。「創価学会」。これは戸田先生が「教育」を抜いた名称です。第二次大戦後、戸田先生が「教育」という語をなぜ抜いたのか。その抜いた意味というのをどこかで考えなければならぬ。よく言われているのは、「教育者だけのものじゃない」ということ。一般的な人達の宗教の団体だから、「教育」は要らなくなったということが、よく言われてきました。僕も母親からそう聞きました。けれども、戦前の動きの中で、例えば、昭和15（1940）年に「創価教育学会」の綱領ができて、会長が決まり、理事長が決まった。この段階では既に、「創価教育学会」は教育者だけの学会じゃなくなっている。現実には昭和15年というのは、大きく舵がきられています。まさに「教育革命だけではない」とさげばれ、「宗教革命、社会革命の時代だ」といって大きく宗教運動に舵をきっている時です。だから弾圧されたので

す。だから、あの共産主義、社会主義を一応押さえるための治安維持法があって、その治安維持法を広く、今度は宗教団体に広げるというようになった。もしも教育者だけの団体であるならば、そこまでの弾圧は受ける筋合いはないはず。けれども、「創価教育学会」とは言いながら、中身は一体何であったのかと言うと、その当時は既に宗教団体になっていた。宗教活動団体になっていた。実はこの辺りがもう少し詳しく、僕も知りたい。でも今日は話ができません。よくわかっていないから。本当はもう少しそのところを追求したい。今日の講座名に「序説」と付けたのはそういう意味です。序説というのとは一種のごまかしです。まだ何もわからないから。序は始まりという。わかりたいけれどまだわからないから、わかったら「序」を抜いてきちんとやります。その「教育」を戸田先生は抜いたのです。それはどうしてかと言うとやはり恐らくこの方がわかりやすいからだろうと推測しています。単純に。そうすると今言った同じことが起こってくる。

「創価の学会」なのか、「創価学の会」なのか。「創価の学会」というのは、「価値創造」です。創価というのとは、「価値創造」とは一体いかなるものであるか。「創価」そのものはどういう哲学なのか、「創価」というのは一体、何を指しているのかという、ある種これもやはり、どちらかという「創価」という思想とか、哲学とかそういうものを勉強する学会です。だから、ここに参加している人たちは、やはりそれぞれ一人ひとりが「創価」について考えるのです。学術の会と考えられるからです。だから勉強会をやったり、色々なことやったりしなければならないのです。ところが、「創価学の会」となったらどうなるでしょうか。「創価学」とは何か。こちらも「創価学」は何かという話なのですが、「創価学」というものを実践する、そういう会だと考えられなくもない。では、「創価学」とは一体何なのかという話です。これは「創価学」というと、もっと私たちにわかりやすい言葉で言うと、これは創立者も使われていますが、例えば「人間革命」という一つの運動であると。「創価学」というのは、実は「人間革命」を説いている。そういう実践の中身だと。あるいは創価大学が目指していること、教育の方向性から言うと、これは、「創造的人間たれ」ということを創立者が仰っています。「『創造的人間』であろうとし続けること」という意味では、これは、「創価学」の会で、創造的人間を目指す会、というようなことになるのでしょね。だから、これも最終的には、「創価の学会」と言った場合には「理論」、「創価学の会」と言った場合には「実践」と考えられないかという問題提起がなされている。これを僕たちがどう考えるかということです。まさに牧口先生の一番先の叫びに戻ります。「知行合一」。「理論」と「実践」というものをどう結びつけるのかということところです。重要なのは、片一方にはきちんとした「理論」というものがあって、勉強するものがあって、片一方には「実践」するものがある。これはどちらかがひとつ欠けてもダメだ。合一されてなければいけない。こういう話にだんだんなってくるわけです。

ここからは僕の個人的な体験になってしまうのですが、昭和58(1983)年に一番初めの自己紹介のところでお話ししたように、創価大学の大学院の博士課程を終えていました。3月で終わったのです。それで、すぐに就職ができませんでした。その理由は、あとから知ったのですが、僕と一緒に創価大学に採用される予定の方がおられまして、この方がアメリカの大学院を卒業さ

れる方で、その方の卒業式が6月に行われる。したがって、4月には採用できず、時期的に遅れるから「だったら一緒に採用しよう」という話で、僕は、その1983年の10月、秋にその人と一緒に採用されたのです。だから、その時はわからなかった。採用されるかどうかということがです。知っている人から見たら、もう決まっているのだからいいじゃないか、というような話なのですが、本人にとってはわからない。当然ハラハラしていた。ちょうどその夏に、創立者からお話があって、「私も忙しいから、私の仕事を手伝いに来なさい」と言われて、北海道の出張に一緒に行かせていただいたのです。ちょうどそれは、創価高校の野球部が初めて甲子園に出た時です。左投げの、江夏二世と言われた、小野君を中心とした創価高校が甲子園出場を果たした夏でした。ちょうどその試合の頃だったと思いますが、あるお部屋で創立者と二人きりになってしまいました。その時に、創立者は僕に、「君はこうした仕事をしていて大丈夫なのか？」ときかれました。「こんなこと」とはどういうことかと申しますと、荷物運びです。いわば肉体労働な訳ですよ。先生は心配されて「やっていて大丈夫なのか」と聞かれました。その真意は「研究のほうに影響ないのか」と言われたことでわかりました。そこで、「いや、特にございません」とお答えしたのですが、「そうか」といわれました。そして、「それは大事なことだな」「大事なこと」とおっしゃいました。その時は、何が大事がよくわからなかったのです。続けてこう言われました。「理論と実践というのが大事なんだ。勉強だけしていてもだめだ。仏法の原理では、半偈の功德というのがある。雪山童子は半分は自分で考えて理論をつかんだ。しかし後の半分は自分の身を投げることによってつかむことができた。これは実践という意味だ。だから、理論と実践の二つをきちっとやらなければダメなんだ。どっちに偏ってもダメなんだ。そうか。じゃ、ちょうど今君はいいことやっているんだな」。それで、ただ「はい」と言って終わりました。しかし、その時の話が創価教育を勉強していくなかで、すごく大事なことだということに気が付きはじめて来ました。

牧口先生が『創価教育学体系梗概』のなかで、法華經に出会って、その法華經をなぜ自分の中核にしたのかというのは、まさにそれなのです。理論を理論だけで、素晴らしい理論は理論だと言うだけで終わってしまったら何の意味もない。つまり自分の創価教育学というのは、理論を掲げて、素晴らしい創価教育だと言われても意味がない。それでは今までの教育学の原理と一緒だ。それをどう具体的に実践するのか、どう具体的に子供たちに教えるのか、このことがすごく大事だ。その為には何が必要なのかというと、法華經の教えが大事だと牧口先生は考えたのです。だから「創価教育学」というのが先にあったのですが、これは理論としての「創価教育学」。それをどう実践に結びつけるかというところで初めて宗教が関わってくる。つまり宗教というのは大きな実践を伴うものだから。これが、一般的な言葉で言えば「知行合一」になるわけです。つまり、実践と理論というのが両方なければいけない。「価値論」があるだけではダメです。その価値をどう自分で活かすのか。どう実際の生活の中で、生み出していくのかということにならないといけない。それこそがまさに「価値創造」です。「価値創造」というのは、理論ではない。理論の価値を生み出すわけではない。実際の生活の中で価値を生み出さなければ意味がないとい

うことです。そこに創価教育の根本的なポイントがあるのだらうということに、最近徐々に気づき始めました。「理論と実践をどのように考えればよいのだらうか」ということを皆さんに問いかけたいと思います。

本当に今日は一日、大変にありがとうございました。